

7599

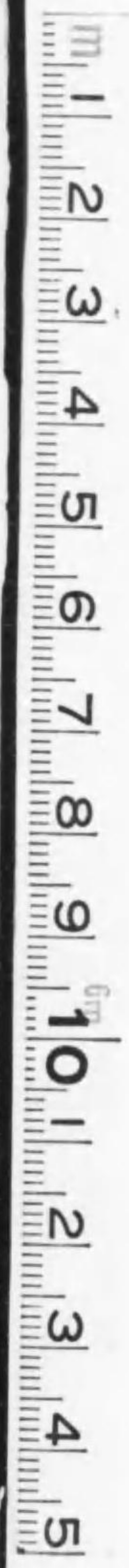
松林伯圓演
加藤由太郎速記

大久保

武藏

鑑

編上



始



特279

320

武藏鑑序前編

大久保彦左衛門は千軍萬馬の間を馳驅し前後七

十二度の難戦に主君の危急を救ふこと既に三度

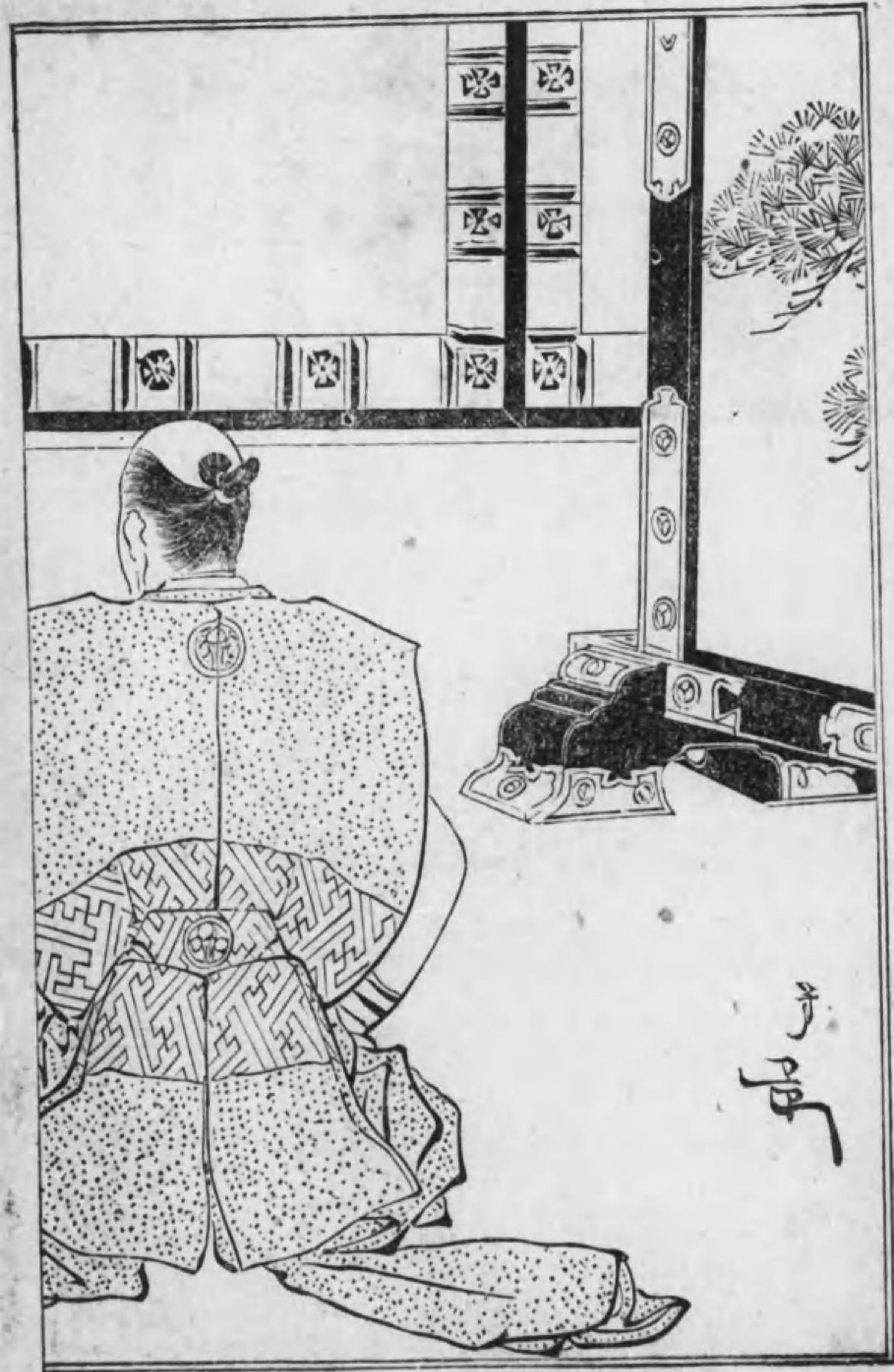
に及び東照神君以來三世に事へて三河武士の模

範を旗下八萬騎に垂教したるは既に奇にして其

行爲の又奇驚ふる誠に稀代の人物にして心中唯

徳川社稷に奉事するあるのみ宜かり大久保の英









大久保武藏鑑

前編

松林伯圓講述

第一席

エ、……此度は何を頼つたことを講演いたさうと存じ居りました
 たが上田屋から強つての請求に任せて極大時代徳川家の盛りの
 時分のお話し併し事は古めかしうございまして古きを温ねて新
 らしきを知ると云ふ古諺もございまして今を去ることも二百五
 十餘年の昔し類り大久保彦左衛門一世の物語りをいたさうと存
 じます此人は拾ねく天下に其名を轟かせまして三歳の童も知

名千歳に傳へて朽ちざるを本書は松林伯圓氏の
 講演にして大久保の一代記を詳に述べたり乞ふ
 一巻を求めて其虚ならざるを知り玉へかし

三十三年下秋

某識

大久保武藏鑑

る歴ありますか唯珍らしいと云ふは那れ程の徳川の功臣が
あつて僅かに三千石の祿で生涯終つて仕舞つたと云ふ之には原
因のありますること又此方は徳川藝祖家康公二代秀忠公三
代家光公此三人に仕へまして年七十七で終つた實に比ひ稀なる
大忠臣である本來なれば五万石や十万石で一城の主諸侯とも云
はれる人であつて何故三千石で終つたと申すと唯今申し上げま
する通り之は諸大名が大祿を食ひまして其諸大名と云つても徳
川へ對しては降参不忠の人々の末が多い利盛大の折には足利
幕下の諸侯と云はれ又信長に仕へ信長亡びて太閤秀吉の世とな
ると豊臣の旗下に從ひました
然るに大坂落城いたして後は全く徳川に身を寄せまして其變化
いたしますことは實に奇々妙々でありますけれども元よりい
たして大祿を取つております事別れに過失もなき人々を其家

大久保武藏鑑

をば断絶させると云ふことはこりや太平の世に亂を招きまする
ものでありますから到底出來ない話しそれから徳川家に真から
附いて居る直參と稱する人々において諸國平天下に相成り征
夷大將軍となりられた以上は吾々も御祿を少しも多く頂かん云
ふこれに當り前のことであります此人々に加増を遣はします
時には日本六十餘州の上り高では逆も足りません
其所で旗本で千石のもは二千石貰ひたいと云ふ情があるから
大久保彦左衛門が中へ立ちまして査これ貴様達はそれでは忠
義を盡すのは祿を増して貰ひたいばかりか此爺を見る此爺は抑
も十六歳天正三年三州長篠の戦ひで初陣をしてこれから格別の
功名は無いが畏れ多くも東照宮七十餘度の御難戦に一度でもお
供に欠けたことは無い最も著明なるは大坂夏冬のお戦ひ及び關
ヶ原の一戦天下分け目の戦ひの時も彦左衛門少しも御傍を放れ

大久保武藏鑑

大した功名は無くとも鐵砲矢銃刀旗は各自も兼て知らるゝ通
り五十三ヶ所あるそれでさへも僅かに三千石働らいて祿を増し
て貰うと思へば百万石頂戴いたしてもまだ不平な位のである此
彦左衛門が之で我慢をして居る以上各自方も必らず祿を食つて
は成らぬ互ひに祿を食ると折角天下太平の世も再び亂れたる世
の中に成る我慢をさつしやい此彦左衛門が宜い手本である斯く
申して旗本三千騎に意見を云ふてをりました
上からいたして兩三度お墨附も給はりましたが之は其度々に難
有い仕合せでござるど一夜は止めておいて其翌日に至ると必ら
ずお墨附をば奉還いたしたと云ふことまづ彦左衛門最後の實話
と云ふのは三代將軍家光公が彦左衛門が彌々之は六ヶしいと云
ふ最早致死期の來つております時に牧野備前守と云ふ若年寄
を以つて三万石のお墨附をお遣しになるど彦左衛門は涙を流し

大久保武藏鑑

て其お墨附を頂きましたたが膝を進めて申したことがあります
サテ彦左衛門は涙を流して其お墨附を頂いて彦思召しは誠に
難有い仕合せでありますが此お墨附は返済をいたします之を只
今彦左衛門が頂きますると云ふと天下大亂の基ゐに相成ります
七十八歳まで生き永らへてさへ頂戴いたさぬ三万石今之を頂い
て未奈に何の樂しみがありませうまた子々孫々へど云ふ思召し
でありませうが子々孫々は已れの働きて大名にでも旗本にでも
なるが宜しい此彦左衛門の働きて死んでの後に何の功もない能
もない忠義か不忠か知れぬ者へ三萬石を興へるは宜しからん
とでありますまだ少しく望みもありませんが之は追つてのこと
云つて彦左衛門は應終いたしたと云ふことであります
されば此人願に望みがないのでは無いが前段に述べます通り
の主意であるから之は御先祖家康公と兼て喋り合せたことゝ相

大久保武藏鑑

見へますマア之等のことも追々口演いたしますが中々意味深
長の處が無ければ相成りません然らば彦左衛門と云ふと我儘親
爺で何か亂棒でも働いて二六時中我儘勝手に殿中を掻き廻して
居るやうにも申しますが決して然んなことは無い世俗有り觸れ
ます大久保武藏館なもといふ本がありすが之を見るに云ふと
彦左衛門は悉皆氣狂ひ親爺であります感は殿中に長刀を帯して
出仕をいたし彦左衛門泰平の世にはあまり刀が長過ぎると老中
から咎めがある刀の鞘ばかりを切りまして身の方を出して殿
中の疊を引き摺りながら錠だらけにして歩いて彦左衛門は切れま
すが身はむれせんと答へた杯と云ふるれでは狂人であります
又鹽に乗つて登城をいたしたと云ふ之は徳川旗下の人々をば
刺いたしたのであり又大名を一寸酷められた様な形も有りま
すが決して疎暴にいたしたことでは無い鹽登城の實録も追々似

大久保武藏鑑

圖がお話しをいたします心得でございすが茲にあまり引
や前文が多いと御退屈でありますから今日よりまづ年號を追つ
てお話しをいたさうと存じます
最初彦左衛門はひとつの功を現しまして潰れた大名の家を立て
埋木に相成つた人を世の中に出して忠僕節婦を見現はし太平の
世の中に御奉公をいたしたと云ふのが八代騒動其次は駿河臺に
屋敷を賜はりまして華奢に耽りまするもの、戒めに亂林には似
たれども或旗本の側妾を二人銃殺いたました之を川勝騒動と云
ふ第三番にいたりましては有名の松前屋騒動の捌き役と成りそ
れから彦左衛門が老年に相成りまして永らくの目通りを遠ざけら
れが將軍家の御不興を蒙りまして永らくの目通りを遠ざけら
れて居つたのを見出しますと云ふ所謂關東大洪水隅田川の激
水乗り切りと云ふのか俗に阿部の水馬と申しまして講談の方で

大久保武藏鑑

表題は隅田川出世の駒と名づけられますが之等は萬年の奇談でございます
八代騒動はまづ一番彦左衛門の若い内でございますから之を申
し上げ夫より順序を追つて看客諸君のお氣に入りさうな所を追
々相談をいたしまして口説をいたす心得であります何うか彦左
衛門のお話しに就てはまづ何所の新聞へも出しません或は小説
的の本も出しませんから伯門の講談としてはお珍らしからうと
存じますから其御心術で御愛讀を願ひます彌々本文に立ち入り
ます
折も八代と云ふ大名之は元甲州出身の人でありまして武田信玄
に仕へた一方の旗頭それが徳川家に隨從いたして八代越中守と
名乗りまして一萬三千石を賜はり國は武州久良岐の郡金澤一萬
石の諸侯でありますから城はございませぬ金澤の陣屋と之を唱

大久保武藏鑑

へたもの關東名所のひとつでまづ俗人も江の島鎌倉から金澤へ
廻ると云ふ八景がありまして入江になつて居て諸君も御存知で
ありませう至つて景色の宜しい所同じ小さい所を貰ふ位いなれ
ば金澤あたりで一萬石で済まして居たのは意氣なことでござい
ませう

第二席

越中守は青雲の志であるから決して無理な事ではありませぬされ
ば成る丈権家に取入りまして愛顧を受けて其引立に由つて追
々立派な身分にもならうと云ふ昔しも今も同じことであります
只今では動もいたしませんと云ふと權家に諷らひ電信を引い
て貰つて立派な役人になりますのそは何か諷らひの様に心術違ひ
のものは申しませんがこりや卑屈ではない中々已れで獨立が出来

大久保武藏鑑

るものでありませぬ上の引立がなければ出仕は出来なから
送りで仕方がございませぬよしや果敢ない人にもいたせよ
りとも其社會に飛び出しまして直ぐに寄席に高坐に出られるもの
では無い段々上の方に引き立てられまして其所で一枚看板に
も赤れまする真打にもなれる下手は其限にわらず役人にならう
と云ふにも使うにも及びませんが然るべき已れの心に合ひまし
たる人に願んで世の中へ出るのほこりや當然であります
八代越中守昇進したいと云ふ望みがありすから時の家老若年
寄其他酒々たる所の人々に二六時中まづ勤めておりました其
野州宇都宮の城主共高十八萬石本多上野之助正澄と云ふ人は當
時徳川家においで飛鳥も落ちますところの機家でございま
す所謂御老中お席と云ふのでありす此本多上野助に取
入りまして其頃は二六時中お逢対客と云ふものがありました今

大久保武藏鑑

のお方は御存知ないのは御道理でございませぬが之は老中諸君が
諸大名に面會をいたしませぬ其日が極まつておりましたお逢と
之を名けますそれを始終缺かさずに出頭いたしまして何時でも
八代越中守が早く其定日に出来ませぬ本多上野助も宜い若者だ
と口にくそ出して申しませぬ眼をかけておりました内に此本
多上野助に一人の娘がございまして之を貞姫と申しまして其時
十八歳であります本多家は御子息もありませんから此貞姫は他
家に嫁入りねば相成りませぬ
然れどもお役がお役であつて飛鳥も落ちる勢ひの家であるから
中々増長いたしまして大抵お所へは嫁に遣らん國主大名と
いへど何日何時か潰れるか知れない國主なぞに縁組を好みは
せん徳川家の直臣で小殿であつても素性の宜しい者を撰んで嫁
を嫁に遣りたいものだ殊には姫にも何か望みがあるからと

大久保武藏鑑

御は六挺子に甘いから姫君の望み通りと云つておられたのでございませす由つて此貞姫におつては腰元や或は附々の女中に勤められましてお逢ひと云ふ日には大名衆が申し上る通り出頭いたしませすのをば物陰において之を隙見をいたしたことが度々あると相見えませす然るに大名衆と云つた所が二百六十餘大名が来らずお客に来る譯のものではありません國主などは老中の所へ往つて對面をする必要もございませんから然う云ふ身分の人には来ないまづ多くは柳の間大名で二萬石三萬石位いの人から世の中へ出やうと云ふ人が多く參るのでございませす之を貞姫が何時となく見初めた男が一人あると云ふ段々様子を聞きませす

大久保武藏鑑

と何うか夫婦に相成つたなれば此身の本望である身は姫御前の果報ぞ……と正道うんあことは云やあ仕ませんが類りに戀ひ慕つておられたのだすると老女からいたしまして御父の上野之介へ話しをした姫君は斯様云々八代様をば御懸望で鏡野の姫子夜鶴と云ふのは之か「ア」左様か越中守は小身ではあるが彼は後年有爲の人である此上野之介も内々眼をつけて居たが眞は宜い所へ目的いたした宜しい此父が折があつたなれば直接に應いたしてやるから左のみ心を勞するなど老女へ沙汰がありませした

之から一兩日経ちますると云ふと本多上野之助登城をいたして各老上席でありませすから意氣揚々として詰所に着座いたしておりました將軍家の御用も終つて之から同席の御老中方も追々退出と云ふ時分に上野之助一人は退出いたしません 上坊主坊

大久保武藏鑑

主御用部屋お坊主と申すものがお坊主の内でも之は冠たるもの
であります毎度伯圖が河内山宗俊の講談で坊主のことは委しく
人の知らないことまでもお話をいたしましたたが御用部屋坊主は
御大老中若年寄此人々に使はれて居ります坊主三役と申しま
しては傍衆御傍お取次大目附此方主の御用を達す坊主が其次ぎ
それから下つて奥坊主表坊主坊主の種類も大層ございます
けれども御用部屋の御用を達す坊主仲間でも羨みとする位いの
ことでもこれへ罷り出まして坊主はつ何御用でございます上
あし柳の間は皆退じましたか坊主はし柳の間は誰方もお退けに
は相成りませんでございます恐れながら御前の御退出を待つて
御退出になるのでありませう上あし左様かそれは氣の毒千萬
のこと然らば一寸使ひしてくれ柳の間へ参つて八代越中守殿に
失禮ながら本多上野が面會したいから御用部屋まで一寸來て吳

大久保武藏鑑

れるやうに鶴の一と聲で直々に御用部屋坊主が此趣きを通ずる
と越中守心の内にはてあ當時飛鳥を落す御老中御筆頭本多上野
殿が直接に逢ひたいと云ふのは何であらうか胸裏さまして直ぐ
様取るものも取り敢へず坊主の跡に次いで來りました上野之助
遙かに見まして上いやこれは八代殿でござるかお招き申して
甚だ失禮さ近うお進み下さい別段に御用と云ふ次第では無いか
ら切望御心配は御無用……お茶をひとつ進せる坊主長まりまし
てございます上予も相をいたさう茲で薄茶を立てまして双方
へ差し出しました越有難く頂戴仕つります間下には越中守へ
何の御用で上さ其川向であるかこりや坊主御用は濟んだから
其所を立てつ誰も居りはせんかな坊主方もお在はございませ
ん鶴を背明け拂つて坊主は引き下つて仕舞ふ越中守は何であら
うかと怖々ながらシリと進んでまいりますと上ア一付

大久保武藏證

かぬことを申す様であるが八代氏は奥方でありましたかお届
けがあつたか無いか其所はぼろであるが御内室はありませ
か此時越中守顔を眞赤にいたして越遅たらぬ縁と心得まして未
だ無事でございませ尤も親類縁家なうから相當の周旋もありま
すが兎角長と短かし心に叶ひませんことのみ多くそれゆへ親身
でおります上ハア其所許は御年輪は幾歳にお成り越二十三
歳に相成ります父越中守の代に御奉公に御召出しに預りまして
武田家の餘類の末とありまして一時は疑念まで蒙りましてご
さいませすが濡りなく勤め終り拙を本領安堵仰せ付けられ柳の間
詰拜命いたしましたるは將軍家の御思とは云へ偏へに閣下の御
推舉によることろ心魂に徹し御有き仕合せに存じ奉つります
此上共に足はぬながらも御奉公一生懸命に心懸けおりまするこ
とでございませ上何うか御忠節の様子も略承はつておるが併

大久保武藏證

し太平の世の中には餘り此侍には忠儀の現はれないのが宜しい
兎角天下に事無かれ程なく又各自方の御忠節も現はれる時節も
あらうが其時は御奮發をなさい越ハハツ上既ては甚だ突然
ではあるが此上野は短氣者であるから思ひ付いたことは其儘に
中絶いたすことの出来な氣性であるが如何である不肖なる上
野之介の娘をば御新造にはお貰ひ下さらんかハツと驚いた越中
守越コリヤ閣下には御戯むれ上アイヤ戯むれでは決して
ない餘事は格別斯様なことに戯むれがあつて宜いものか夫婦は
人間の大家倫である不肖上野の娘貞と申すは今年取つて十八歳不
束なる所の我儘育ち之を妻にお娶り下さらば上野又悪しき様に
はいたしますまい

第三席

大久保武藏鑑

上亦御家来とも御相談の上御親類ともお打合せのつた後に
何うか色好きお返事を承まはりたい 越はいは是が事實でござい
ますなれば誠に越中守身に取りましての大慶至極と存じ奉りま
す親戚と申しました所が皆私しから見ますれば目下同様雨親と
申してもほんの一名の老母が居りますのみで是も私の勝手次第
でございませう別段相談にも及びませぬ一身の外は相もありま
せぬ越中守が心で決定いたしました事は金銀の如く甚だ浅果敢
には似たれども此場にて速かに御受けをいたしませう何うか
御命を頂戴いたしたう存じます 上それは大慶である然ふい
ふ活潑の人が上野は大好だ親類と相談家来と懇談を遂げた後夫
れでも未だ迷つて跡は占者に占ひを爲て貰をう或は神佛の前
が何うでございませうと申すは迷神者といふ者で大丈夫たる人
間の爲すべき事ではない手前の田に水を引くやうではあるが流

大久保武藏鑑

石は越中守願あり上野守威服いたす其氣象は實威服いなり
に居つて言葉を交したこともなく唯其舉動風采を見たばかりで
も此人を懸慕うといふは我娘も…… 越何んと仰せられます
上いやははちと言ひ過ぎたが可笑ひ下さるな然らば恥度言葉を
番ひまするを其口は夫れなり別れて仕舞つて越中守はさあ是
からば物も手に付かぬ位の悦んで自分の屋敷へ立歸つた
屋敷といふのは飯田町中坂の上でありませう當今富士見町に接し
て居ります所一万三千石で小なりと雖も諸侯の屋敷立派なる一
と構へ殊に福有でございませうから御殿の内に入りませうと早速
ながら江戸表老鈴木爲右衛門用人齋藤龍左衛門弟八代重三郎是
は未だ部屋住み……是等と呼出だしまして 越今日殿中にて御
老中本多上野守殿から直接に是くの縁談申し込みがあらうた故
に其の方共と相談もなく家の吉事と心得たから速やかに受け

大久保武藏鑑

をいたして歸つた餘り粗忽のやうではあるが纏る話しなれば一
同異議はあるまいな悦んで呉れるといふ用人家老又弟何んの異
議もありませぬ職に萬々歳恐悦至極の事でもございませぬあるか
ら其所で國家老の許へも此の趣を申送りました此國家老は申す
までも御座いませぬ武州金澤の御陣屋に居りまして折々参勤交
代をいたします山中角之進といふ今頃年齢は四十格好八代家の
執權であります此吉事を聞くといふ取急いで江戸表へ罷り越し
まして主人に目通りをいたして先づ恐惶至極と述べた是も異議
はございませぬ早速ながら本多家に返答に及ぶ上野守も悦び取
分けまして貞姫は天へも登る心地でございまして早速ながら將
軍家へのお届けも済んで吉日良辰を選び千代も壽く婚禮の儀式
も終つて夫婦の中も大層睦しうございませぬ
此間だに色々お話しもございませぬがクドクドしい所は残らず願

大久保武藏鑑

きます然るに此貞姫は標致も大層宜しいが嫉妬が深うございま
す一職に此貞姫は大悪婦といふことでございませぬ其惡婦とい
ふのは心の醜いのを面に表したものは外面女菩薩内心如夜叉流
石は十八萬石姫君でありますから深窓に養ひを受けて窈窕嬋娟奸
たる所の花の顔月の眉けれども心の奸曲いといふものは此りや
性質だから如何にも仕方がない殊には己れが焦れた男の越中守
殿と夫婦になつてから後といふものは傍らに居ります侍女小間
使ひの女子供にまで一寸目を注げるといふ御前が誰某れの顔を
穴の明く程見て入しつたのあれは少し怪しいのといふ其故に少
しく人間らしい顔容をした者は皆横斥されるやうな形ちでござ
いますコリヤ奥様のいふ通りになりませぬ奥向きでありまして殊
には五千石といふお臺所を持って居る
奥様のお實家から五千石と云つたら大したもののでございませぬ

大久保武藏

れゆへまづ俗に申す八代家は噂ア天下越中守殿も頭の上る瀬が
無い一とつ間違ふと告口をされたりなんかすると自分の不首尾
にもならうと思ひますから斯う云ふ奥様を貰つたのは生涯の不
作でございませ一方から云ふと大層結構な様ではあるが決して
女房には貴顯なその娘を欲しがらるものでは無い二六時中の女
房の爲めに頭が上らないそれだから演者伯圓などは若い時分
には華族からお姫様を女房にやらうと再々云はれましたが断は
つておきました
八代越中守も今更少し何うか面倒に成つて来たやうな形ちで
ございませすろりやあ奥様の惚れて居るのは宜しいが餘り執拗つ
て五月蠅いその内に奥様の心を慰める爲めには成るだけ醜態を
ば傍においてお仕ひなすつた方が宜からうと云ふことをば戯む
れに云ふと奥はんは然うでございませす見目能き婦人が殿の傍

大久保武藏

におりましたしては妾が氣の休まる瀬がありませんから寧ろそのこと
然う云ふことにいたしましたせうと前々の女中が斯う交代いたして
まいまする内に段々人間らしいものを去つて仕舞つて先づ化
物屋敷を見たいな形ちに相成つてまいりました
廻町から飯田町の桂庵の評判と成りました亭おさんは何で
ございませすか姐さん何う云ふ所へ奉公が仕たいんで女左様で
がす私もハア何でもお大名屋敷チウのエお末奉公にでも遣へ
つたら行儀も本當に覚えへると思つて然う云ふ處の口が有りま
せうか桂庵番頭と相談をいたします亭八代もんだねエ那やあ
番左様でまづ八代福で……姐さん何歳で女ハイ十八でムリ
やす番然かいお前さんの其の穴は何したんだい無エのかい
有のかい女ハイ些つとばかり明いておりやす番些つとばかり
りは驚ろいたね何うしたんだい女四つの時に天然痘で皆ん

な穴が塞がって仕舞つて漸く一どつの方はケンボウナシの御利
益でやつと明きましたんでささいおす夫故こんな顔色になりま
して番や決して心配には及ばないお前さんのやうな連中は三
月の變り目には持つて往くお屋敷がおりますからお世話をし
せう安心してお在なさい雜司谷の百姓宜い……其所で成るた
け斯う云ふ女ばかりを選んで桂庵が八代家にお面謁をさせると
云ふと奥様の御意に叶ふて直ぐにお給金が極まつてお抱へどな
るさあ斯の如くの次第であるから此頃には天下太平一萬石以上の
大名屋敷と相成ると女中の五十人や六十人はおりますそれが何
れも何うも奇妙キアレツ黒岩の化け物を見たいな女ばかり八代
越中守お城から退出いたしてお歸りになる奥様のお部屋へお出
でになるお云ふと女中一同雲洞を持ちましてお迎ひに出るのを
見ると近頃馴れては來ましたがそれでもアツと身の毛が慄つ百

鬼夜行の巢突妖怪變化の樓家のやうな心持がするから度胸の宜
い越中守ヤツと氣を取り直して殿へ、之で奥が先づ氣が落
付いて居ると云へば誠に結構な事であると其化物の中で奥様を
御覽になるから彌々美しく相見えませ又奥方は何にも用はない
朝から晩まで化粧一方でありませ又衣服は華奢風流を好み身に
は數萬金を費やしまする装であつて唯御自分のお連合に氣に入
られんといたすことのみを勤めとしておられる越中守も兎角世
間に事無かれと一家に風波の無いを喜んでおられます
時に一旦太平に治まりましたが未だ徳川家のためには此上も無
い目の上の瘤と云ふのは所謂大坂であります太閤殿下御他界の
後にいたりまして未だ大坂に精忠の人幼君秀頼公を補佐いた
して然も大坂は籠城と云ふ噂も高く相成つておりまして豊臣
譜代大名加藤、福島、淺野、黒田を初めとして大頭は皆關東へ引き付

大久保武藏鑑

けて仕舞つたけれども名に負ふ浪人と表向きは名を付けても其
實中々浪人では有りません眞田幸村木村長門守後藤又兵衛片桐
且元を初めとして大坂には海内無双の智勇御歩の人もあり又大
元師もありまして孔明三舎を避け楠足で駆け出すと云ふ英雄
もあから關東のためには此上も無い大敵である終に此度大坂
と徳川御和談破れ慶長十九年霜月關東勢四十五万大坂へ繰り込
むに就いて八代越中守も一方の霜月關東勢四十五万大坂へ繰り込
八代越中守の發端であります

第四席

前回に述べました八代越中守奥方お貞の方は妬嫉深うございま
すから決して愛妾側妾など云ふもの噂さは絶へてありませ
んがさて平々凡々たる吾々の社會と違つて苟くも一万石以上の

大久保武藏鑑

大名參勤交代と云ふことがあります此時あれば江戸から放れま
すること僅か十里餘の武州久良岐の郡金澤ではあるが國と名が
ついてあれば之へ半年は詰めてをらねば成らん此時は幾何程妬
嫉深くとも奥方は一緒に往くことは出来なぬ其金澤に半年をり
ます折である愛に國家老山中角之進も元より承知の上で伊藤金也
と申す浪人を召し抱えまして金澤の陣屋に宅地を賜はり僅か
に百石ではあるが御殿を貰つて彼が娘の菊と云ふものを越中守は
者が今では祐筆格に相成つて彼が娘の菊と云ふものを越中守は
寵愛遊ばしてお出でなされた
右お菊は殿が情の胤を宿し産み落しましたる男子は表向まだお
届けは出てをりません八代源三郎と名乗つて金澤に成長いた
して居る山中角之進は常に心配をいたすは此事で主人國詰の時

大久保武藏鑑

いらく物語りの内に角早く大公儀へお届けを遊ばしませ御
長の後は無諭御家督人でありますから源三郎様の埋れ木に
らざる様お取計らひあつて然るべくと常に申し上げる越中守も
道理とは思つて居るが公儀へお届けを出す以上は本多上野之介
の耳に這入りませす、するど妬嫉深い奥方が騒ぎ立てるかも知れん
之よりいたして家の風波を見なければならん早く届けは出した
いものであるかど始終之が心配の一つに成つて居る人間は那あ
云ふ身分では何事も心配をあるまいと傍から思ふやうなも
のでも無い得て人には他人に物語れぬ心配の断へぬものであり
ます越中守殿なぞも即ち夫で唯源三郎殿が成長いたすに従つ
て表向き將軍家にお届けの出来ないことばかりを苦に病んでを
られたました
然る所へ前回述べたる通り大坂お手切れに就いて出張を命せら

大久保武藏鑑

れましてまづ一萬石では兵士の百人も出さなければなりません
勿論其内五十人は足輕組だ餘る五十人は御番士にそれから
徒士が四十人都合百人の同勢まづ今なれば一小隊と申すので
さいませうけれども此所ぞ一世の晴れ軍と云ふので一萬三千石
の身上を振るつても綺羅美やかに出陣をしやうと云ふこの意氣
込みでありましたから八代家の武者押しは立派だと江戸でも評
判をいたします、位は慶長の十九年霜月十日のこと江戸表
を出立いたしまして河崎本陣が泊りと成つて其翌日は書に神
奈川を通り越して程ヶ谷本陣と云ふ之は八代家ばかりではな
百何十頭と云ふ大名が引きも切らずに上るばかりでございませ
から東海道の間は中々大變なものでも宿制なぞにもいろいろ
し支へますから其間の宿々が平素は見返つても見ぬ様な怪し
げも百姓家まで香兵士の宿に當りましてるれで足りないから少

大久保武藏鑑

しく大きく出来て居る手習ひ所今の學校又は寺院佛閣皆宿どな
りまして居れへ幕を張つて面々の名前を高札にいたして立てる
と云ふ位ゝ八代越中守の本陣は程ヶ谷宿之は前々から宿御がチ
ヤンと出来てをりますから八代越中守の名前を立派に立てまし
て晝食をいたして居るその混雑の中に一人若侍が出でまして
侍恐れながら申し上げます 越中守 侍只今お國家老山中角之
進殿金澤より出張いたしましてお目通りを願ひたい趣きでござ
います 越中守 角之進か参つてくれただか予も金澤へは僅かに三
里ばかりの所であるから立ち寄りたいたは思つたが上の思召し
も如何巳れの勝手に在所が近いからと云つて往來を横きつて寄
り道をいたしたとあつては上へ申譯もない恰度幸はひ角之進を
此へと申せ彼一人であるか
侍ハッ申し上げます七八歳に相成ります最も氣高き小兒尙乳

大久保武藏鑑

母とも相見ます二十歳あまりの美婦人が付き添ひまして腰掛け
まで控へております 越中守 胸に答へたには七八歳
の小兒といふは遠ふ方ない源三郎二十歳あまりの婦人と云は彼
を産んだる母親の菊であらうが云はず語らず暇乞に見たるもの
であらうかと越中守何事も云はず 越中守 ハ、ア左様か假りにも婦
人を陣中へ近寄せるに云ふは如何なるものであらうか角之進と小
兒を呼べ 侍ハッ若侍は引き取り直ぐに庭續きからいたしまし
て兩人を案内におよぶ本陣上段の間に熊の皮の布皮を設けて泰
然として扣へて居りますのは八代越中守進んで出でたは國家老
山中角之進八歳に相成ります幼息源三郎を連れてお椽側から上
り来りました何も云はずに平身低頭いたして居る 越中守 角
之進只今も辱さをいして居つたが一寸金澤に立ち寄り度存じた
が上への思召を傳かり差し扣へておつたる所へ宜うござ之へ見

大久保武藏鑑

られたるぞオー、源三郎にてあるか久しく逢はぬ内に大層大
きう相成つた柔和しういたすか角ハ、ッ御前此期に及びまし
て何事も女々しきことは申し上げませんが若君様におきまして
も斯の如く御儀やかに御長遊ばしました唯氣遣はしきは御抱
膝前でありますから一同其事をのみ心痛いたしおります然し
分にてはまづ安々御成長を樂しみおります就きましては御出陣
の際斯ることを申し上ぐるも尊意を煩はせまするやうではあり
ますがお届に願ひおきました若君お届の儀は御軍監目附にでも
一應お届に相成つておりませんと甚だ何うも氣支はしる存じ
ます之を願ひたく且つは御暇乞目出度御陣遊ばしませるまで
の御名感として罷り出でましてございます御聞き届けの程を願
はしう存じ奉る越角之進其方の言葉は越中身に答へて喜ばし
う存ずる早速ながら其筋へ届けもいたさう今まで何故此事の延

大久保武藏鑑

引いたすと云ふ意味深重は耻かしながら越中守の胸中其方は推
量いたしてくれるであらうと存ずるが此度は左様なことは申し
てはおられん戦場に出るものは屍は原野に晒らすとも名を止む
ることと思ふのみ最早此身は亡きものと覺悟いたさねば相成ら
ぬことである此越中守とても無事に凱陣が出来ればるれに越し
たる喜びはなけれども相手は名に負大阪方萬一のことも有之れ
ば跡々の始末は角之進其方へ相頼むぞ源三郎をば成長さして引
れまますやうにコリヤ源三郎之に來いと敷皮の上は幼息を引
き据まして勇猛勝れた八代越中守吾子の願を手にて押さへ顔つ
く、と打眺め越武士の家に生るものは命より名を惜しむと
聞く其方無事に健康に成長いたして一萬石の家名を汚さず適ば
れ八代家をば相續して「へは忠義を盡し又僅かの家來でも下々
を飼れんで名君と云はるゝ様此父の言葉をば忘るな此父は今角

大久保武藏

之進に云ふ通り目出度う凱陣いたせばそれに越したる喜びはな
けれども元より浪花の露と消ゆるは覺悟の上萬一吾が亡き後は
角之進を親と思ひ朝夕云ふことを聞かねば相成らんぞ源ハイ
御父上その事は宜う合點いたしておりまする早くお勝軍があり
ましてお歸りの日をば和子は祈つておりますると早や涙ぐむ幼
見の様子は虫が知らず親子の別れか愛着は胸を刺すばかりであ
つたが心を取り直して越中守 越最早午の下刻の出陣に聞もあ
るまい女やしきことに時刻を送るは上への恐れさ角之進萬事
は驚むぞ 角へッ... 院分御儀固比ひ稀なる御功名の程を影
ながらお國表に於いてお待ちまかり在ります御機嫌克う其内の
陣の太鼓御軍監目附兼松又四郎の手から八代越中守殿願々に御
行列を早められて宜しからうと達しがありました

大久保武藏

ッレと云ふので一同勇み進んで旗塵物は山風に翻々と翻へりま
して程ヶ谷の本陣を立ち出でた越中守は馬上にあつて左りの方
を振り返つて見ると山中角之進左りに陣笠を下げて土下座をい
たして居る幼息源三郎も父の顔を打目成つて居る後に二十歳
あまりなる美しい婦人が涙一ばい眼に持ちまして何にも云はず
千萬無量の訣別越中守も万卒の手前を思ひまますから振り返り
もいたさずして手綱振ひ繰り程ヶ谷の山道さして進んで往く之
が親子主従一世の分れと相見えましてから簡單に大坂の事を述べあけれ
暫らく預りといたじまして之から簡單に大坂の事を述べあけれ
ば相成りませんから其御心得で
抑も關東勢は兩將軍御出陣されば御供の諸大名へは夫々に御役

第五席

大久保武藏鑑

當等があつて諸侯、御代、外様、旗本、御家人、雑兵、惣軍に至つては四
十五万人と云ふ之から大坂におきましての戦争が初まります
併し之は難波戦記其他の歴史にありますから此所に述べる必要
は有りません中にも鳴の口は上杉中納言景勝一万五千福口は
佐竹左中將義信の八千餘人先手は佐竹六郎此手の御軍監目附は
兼松又四郎が萬事命令を傳へてをりました然るに八代越中守は
小身でありますから戦へ出でましては僅かに百人ばかりの人
數を以つて一方の旗頭と成つて駆け引きをするに命に由つて
出來ぬ死念ではありまするが兼松又四郎よりの命令に由つて
佐竹義信の手に屬しました之を相備へど云ふのであります所が
其時の戦かひは城中は一の柵矢野和泉守、二の柵は飯田左馬之介
三の柵は大谷大角、佐竹勢はさしも東北に聞えを取つた若武者樹
ひであるから一の柵まで打ち破りまして勢で助大になつて其有

大久保武藏鑑

様は宛然潮の湧くが如くであるが此關東佐竹に怖れけもなさず
城中よりは名に負ふ若武者と聞えを取つたる木村長門守組下長
原智徳院、大井浪右衛門此一手が繰り出しまして千變万化非常の
働らき爲めに折角取つた一の柵も取り返され殘念なから惣敗軍
と相成りましたから無念至極なりとあつて八代越中守において
は踏み止まり居るをいたし戦つてをつたが江戸の星敷で奥様に頭
を押へられて居るところは靦いやうではあるが戰場へ出ては此
上もない強い人でございます鬼の如くの働らきで敵名を打ち
取りました何がせよ東西南北から大坂方援兵に取り圍まれ殘
念ながら三十二歳を一期として天なるかな討死を遂げられまし
たは誠に痛はしいことでありまするかな討死の戦ひもありま
したが遂に又關東大坂御和談と相成つて一時軍勢を引き上げと
云ふ事で御親陣の御沙汰のあつた時に大御所家康公新將軍二代

大久保武藏鑑

秀忠公よりの懸るなる所の御沙汰で
此度大坂表に討死いたし候ものは假令身輕きものなりと雖も
も家名相續疑がひなく本領安堵申付けべきものなり又若年に
して嗣なきものは血統を論ぜず系圖を以て願ひ出候ものには
跡目相續仰付られ候
斯く御沙汰がございしましたから此上もない寛仁六度でございま
すがさて一同は江戸表へ昔お引き上げに相成りまして家名は夫
々立ち討死をした遺族も悲しひ中にも喜びまして江戸表の賑ひ
は以前に勝ることであります其中にも飯田町中坂八代家におい
て今日は家督の儀に就いて會議がある依つて國家老山中角之進
も疾くより江戸表に出張いたして中坂の勤番長屋を山中の住居
と定めてあります當日に至り角之進御前に出頭いたしますると
正面には縁の墨髪を半ば切つて紫の紐にてぎりくど之を巻き

大久保武藏鑑

凡て色氣の衣服を廢しいと殊勝氣に扣へ玉ふは當時名も貞真院
と改めました八代家の後室にお貞の方でございます錦の褥に座
を占め水晶の念珠を携へたる体はいぢらしく又お氣の毒に相見
えた
貞真院此時二十七歳其傍らに討死いたした越中守第八代重三郎
と申すは當時二十五歳であります未席には家老齋龍左衛門の
他役人田中七兵衛鈴木爲之助何れも扣へおります中央には國家
老山中角之進威儀を正しく扣へて居る之から家督の評定に相成
りますると貞真院言葉を發しまして貞角之進此度の儀は申さ
うやうなき儀にて最早泣いても果てしなき事であるから妾は嘆
きますまいが只大切なるは八代家相續の事である幸は重三郎殿
もお扣へてとして當家にかられる事でも有から重三郎殿を以つて
御家督相續の儀をば上へ願ひを出だされた方が一家中安堵の基

大久保武藏鑑

にも成らうと存ずる連合討死いたされたは此上もない忠節
御高名手柄に由つて家名相違なく本領安堵仰せ附けられると云
ふ事なれば一日も早く重三郎殿の御家督相續の儀を願はしう思
ひまする江戸家中の者は残らず承知いたしましたがお前の了見
は如何であるかよもや異存はあるまいと存するが角之進の返答
を相待つて計らひませうと思ひます角はいつこれは奥様の仰
せ至極御道理又江戸表の方々御承知ある所にさて角之進ばかり
不服を唱へますと云ふ理由ではありませぬが唯一つの殿様が
お手落ちに相成りましたことを悔むのみであります八代家には
御舎弟を以つて御准養子になさらずとも御先代様御妾腹に候へ
ども御男子のあること御存知ないとも相見えませぬ最早隠しても詮
なきこと故明白に言上仕つりませぬ當年八歳になり玉ひ八代源三
郎殿と申し上武州金澤の御陣屋に安らかに御成長遊ばしていら

大久保武藏鑑

せられます申し上げかねたる事ながら奥方御格氣を怖れ玉ひ極
秘密にて伊藤金也と申す浪人者をお召し抱へになり其者の娘菊
といふ者にお手がつき御別室となし玉ひ菊の産み落し候御男子
即ち源三郎殿と仰せられる御出陣の際程ヶ谷本陣において御
親子の御對面も有之又御軍艦目付兼松又四郎殿までお届け遊ば
せとお勧め申し上げましたる位初末でございませぬ斯くの
通りの始末ゆへ今重三郎様御家督を拒むといふ理由ではありま
せん御評議を今ひとつ御改めあつて願くば源三郎殿をお國表
より呼びいだし改めて御家督御願ひの儀正當であらうかと角之
進においては存じます最早御評議にもおよぶまいと存じます
如何なものございませう
忠臣山中角之進の一言に兄嫁貞真院重三郎も一言の返す言葉も
なく家老用人共も唯然として願と願とを見合せておつたが蒲

や知つて居るお國の模範然れども日蔭者だからと思ひまして之
を叩き潰して仕舞はうと思つたが山中角之進の面魂、頑として動
きさうな体も見へません大きな其座が白け渡つて見へました、す
ると此時重三郎最前より黙しておつたが重元老角之進の申す
るゝ所を聞いて見れば一向心付かざる今までの一伍一什、如何に
奥方に御遠慮なさるからと申して大丈夫なる一諸侯が其子が八
つになるまで之を日蔭者にしておられるといふ之は亡き兄君の
ちとお手落かと存する併し兄上の事を彼之議論をしても益なき
事であるからまづ當家の血統源三郎といふ小兒のあるころ時に
取つての幸ひこの重三郎なぞが何とて兄上の跡目相續を願はう
や一刻も早く角之進其幼息源三郎を江戸表に呼び出して御老中
方へ速かに御家督の願ひを出された方が宜しからうと存する左
様存するやう今の場合に至り彼之御斟酌があつては亡き兄上眞

途の妨げにも相成らうと存するその心得てくれませうにと思
ひの外なる重三郎の一言言葉終つて眞眞院と互ひに眼にて何か
打ち合せをした様子之より眞眞院また重三郎如何なる舉動をな
すか次席に

第六席

角はつ誠に御舍弟の御言葉御道理千万の事御舍弟様すら斯の
如く眞眞院様においても御異存はありませうかど存じますか
如何でございますか眞眞院莞爾笑つて眞妾に何の異議があり
ませう只御世嗣が無いと云ふところから重三郎願をばお立て申
さうと一筋に考へたのではありませうが御先代お忘れ片見のある
以上は共々喜ばしい事でありませう併し妾が如何に格氣深いから
じて十年足らずも何故其事をば妾にお話しなきかそれがお恨め

大久保武藏燈

しうございいまするとぼろりと落す貞真院の涙何方から出るか此方において評定は之に決して山中角之進は夜更ける頃に御殿を
つて中坂の自分の長家へ歸りはつと一息吐いて燈臺の元に腕
を組んで考へておりました
此八代家の家老山中角之進と云ふ人は最も思慮深い人であるか
ら奥の評議終つて勤番長家に引き取り何事も云はず只考へて居
る若輩の又一なるものうれに進み又且那樣大層御退出がお返
うございしました私共の口を出すところではありませんが御家
評定の儀は如何成行さましてございますか何とやら私共も
心配で堪りませんから伺ひます角お一又一宜く聞いてくれ
た其方もお國におつて朝夕委しい事を知つて居るから定めて心
配でもあらうが今日の御評定の事も一通り話しをいたすから以
後の心得のため聞いておいて呉ると之から前回の御殿の有様

大久保武藏燈

を残らず述べて角さ斯う云ふ理由であるから申し惜き事では
あるが貞真院様は何うも重三郎殿と通じておりはせんかと疑ひ
のいつ夫故重三郎殿おば家督相續をさして二代の奥方今の切
髪は昔しに返へる結髪ひ櫛并で八代家の奥向を自由に仕様と云
ふ趣向では無からうかと角之進は考へるそれに昨日に變る人心
江戸家老用人の人々の胸中すらも何うも怪しい何にいたせ此角
之進は明朝に至つて速かに一旦金澤へ立ち歸り伊藤金彌殿と相
談いたして源三郎殿のお身の上が大切であるから源三郎殿をば
御出府を促がして假令御妾腹にもいたせ八代家に乗り込まして
仕舞はなければ仕方がない明朝は早立の心得であるから支度を
しておいてくれろ又委細承知いたしました左様な事もあらう
かど存じましたから江戸は火事早いところでありまするし旁お
荷物なぞも取り纏めておきました角それは宜く氣が付いた宜

大久保武藏鑑

しく酒は憂ひの玉筍少しは憂さの忘れ草一献傾けやう其方も相をいたしてくる
旅情を慰めるために山中角之進は小者を相手にいたしまして一酌を傾け宜い心持になつて暫時の勞れを休めんと奥の一間へ引き取りました跡片附をして若黨吉田又一は之は寝る間もないと思つたけれどとろりと横になりまして僅かの酒に主従は高麗前後を忘れるといふは不覺な様ではありますすが間に敵するものは防ぎ難しといふ警がある小夜更けて鐘の音もいと哀れに聞える真夜中頃何れから忍んでまいりましたか伺ひ寄つた三人の曲者而体は深くも包みまして奥の一間の臥床を知つてか抜き足差し足忍び足ふつと消した有明如法闇夜を幸ひに占めたいふ一聲と共に山中角之進を突いたか刺したか扶つたか角トーツ……と云ふ悲鳴を上げまして角己れ悪人と立ち上るところを三人は

大久保武藏鑑

起しも立てすすた〜に斬つた様子此物音と騒ぎに驚きましたる又一が又「やあ曲者と云ふ内に三人の曲者は闇紛れではありますすが手の方へ疊を踏み立てましてまだ一人邪魔者が……と云ひながら間は綾なす白刃の光閃き渡るを南無三と又一辛くも其袖下を掻い潜つた
忠僕吉田又一は自分が死んでは無證據に成らうと思つたから辛うして袖下を潜り勤番長家の窓桁を外し凡そ桁を二本程取つて突然來へパツと風を生じて飛び出したけれど其荷物や何かも持つていで宵の仕度は仕ておきましたけれど且那は殺されて仕舞つたに違ひない忍んだ奴は三四人顔は分りやうもない此所で愚圖々々して居れば此身も殺されて仕舞う此一大事をば一刻も早く御園表へ涉進なさんと氣を取り直した又一は怪し氣なる姿で飯田町中

大久保武藏鑑

坂の通りへと出でました之から金澤へ一足飛びと頃は四月の二十日の夜月はあれども影中坂通りを横に見て浮世は憂しの牛が淵暗かぬ憫れの雉子橋や忠義の心は一つ橋護持院夕原を左りに眺め本町河岸より一石橋西河岸越えて京橋より新橋金杉本芝から氣も高輪の途丁品川驛は飛ぶが如く露に涙の袖ケ浦鳴るや驛路の鈴ヶ森大森越えて川崎や左りは名に負ふ大道憫れ利益もあゝるなれば無難に道を通させ玉へと急ぐ内にも道拜して鶴見生麥打ち越して右手にふるは浦島寺左りは萬里の蒼海ありハヤ神奈川も臺の町左りは野毛裏本牧に根岸に並らんで十二天横濱繁昌異人館伊勢山鐵橋スターモン沖は蒸溜の黒煙りそれは遙か後の世にまだ其頃は更になし程け谷宿を右に見て能見堂に筆捨松三島の里に程近き久良岐の郡金澤の陣屋をさして御注進くさても武州久良岐の郡金澤の陣屋においては夢にも知らぬ江戸

大久保武藏鑑

表の騒動彼の百田又一が立ち返つて委しく事情を物語りました一同大に驚ろきます内にも取り別けて山中角之進の妻伴豊之進之は又別段の驚きで尙も委しく其夜の始末を聞きましますと口借し涙に暮れまして又奥様若様申し上るのも残念至極のことであります其夜旦那様は御殿からお歸りに相成り御家御評定の儀を彼之とお話しに相成りまして明朝は早く金澤へ歸り兎にも角にも若君を江戸お屋敷へお入れ申さなければ相成らんとお話しでございまして其中に夜中の大騒動燈火は消ておりますししかどそれとは分りませんが確かに真真院様及び重三郎殿の一類の者かと私しは推量致しました併し此事を早くもお告げ申しておきたいと云ふは江戸表から必ず討手が来るは必定でありますから何うか少しも早く御用心が肝要でありますると此物語りに伊藤金彌は今年六十歳の老体であるから分別も強く金成

る程又一の云ふ通り亂暴猖獗に出でたる江戸表の人々此上妨げ
に相成るは當御陣屋にあるところの者共であるから之をば亡き
ものにいたさうと別けて大切なる源三郎様の御身の上をば亡き
ものにせんとするは必條之は斯うやつてはおられん少しも早く
何れへなりとも立ち退かなければなりませんと金彌は思慮を回
らししましたが無にせん僅か一万三千石の陣屋で武士と名の付
きまするものは少ない殊には大坂陣に出張いたして多くの兵卒
までもまだ歸つてまいりませんと云ふのであるから漸くに陣屋
には輕小者まで入れて二十人も男らしいものゝおるので外は
老人の伊藤金彌山中の伴十八歳になる豊之進それから郡奉行と
名けまする中西五助之は五十格好其外には男一人もなし兎やせ
ん角やと評定をいたしたのが金彌は此時に決心いたしまして金
まづ一番大切なをいたした若君源三郎其次がお腹お菊殿吾娘とは申

せども之は大切なる若君をお育て申す人、次で山中氏の御後室
……貴女も御嘆きはさる事ながら以上御三方又一御苦勞だがお
前此三方を飽くまでも守護いたして一旦何れへなりとも御立
きあつて其後又計るべき術もあらう

第七席

何卒八代家の恢復いたす様證據になるべき品々は即ち此通り
であるど前件越守中遺兒に相違ないと云ふ證據の品尙又越中守
が山中角之進に授けあつたるところの一口の短刀之も後の證據
の一どつ彼之れ掻き集めまして名残りは盡きませぬと山中の後
室が由やしくも先きに立ちまして多くの人を屬まして若黨又一
と供に召し連久良鼓の郡金澤の陣屋を跡にして行方定めぬ鎌倉
山へさまよひ入りました

大久保武藏鑑

話聞つて江戸表においては夜が明けると直ぐに人数を繰り出
しましたと相見へ此時は鈴木七兵衛の弟爲之助之が大將と相成
り足輕仲間都合五十人前後に從へまして江戸表よりいたして遠
からざる金澤の陣屋をさして押し寄せたのは恰度翌日の辛の下
刻であります無二無三に金澤の陣屋に攻めかゝつた豫て期した
る事なれば陣屋に於いては伊藤金彌が總大將と相成り郡奉行
西五助、山中の伴、豊之進、其外足輕小者二十人ばかり一同必死の覺
悟で打つて出でました暫らくの間挑み戦かひましたが寡は衆に
敵せず遂に残りなく討死を遂げまんまど金澤の陣屋は謀叛人の
手に渡りました

大久保武藏鑑

りまして水呑百姓で己れは若黨奉公を稼ぎにいたして居たとい
ふ久り振りで親の許へ立ち歸りました又此度は御主家の不慮
の御災難止むことを得ずお三方をお連れ申して之へ參つたが中
にも尊ときは一万三千石の御血統、世が世であれば八代越中守機
の若君と立派にお名乗りの出來るか方をお連れ申してまいつた
と江戸表の騷動を委しく執歸りに相成ると田舎婆あではありま
するが又一の母親だけ事が尋つたと見へて母お主に忠義とい
ふ事はこりや人たるものゝ常であるとの事私は何にも知らぬが
宜うお世話を申し上げて敵の爲めに悟られぬやう其方が御奉公
をいたしてくれやと母親の言葉に又一も一層勵みが出でまして
之から三人を養ふことになりましたがさて財産と云ものもあ
貯へても湖ければ只身を以つて一身にお養ひ申すの外はあ
と自分の身を寝る間も寝ず苦しめて主従をお世話申上げてお

大久保武藏鑑

りまする足らぬ世帯ではありまするが昨日と経ち今日と暮らし
まする内に最早五月も経ち七月八月九月十月十一月恰度十一月
十七日が徳川家康公の御他界でありました世上も物騒がしく大
坂落城の後に至つて大御所の御他界と云ふのであるから關東八
州は取別けまして非常を戒め諸事嚴重の御沙汰が出でまづ當
分騒がしい事もありませぬ晴さに聞けば八代重三郎は八代石見
守と任官いたして上のお奨へ目出度く善人は亡びて悪人共の世
は眞つ盛り凡夫盛んに神祟らす八代家は益々熾んなりといふ其
中にいと哀れを止めましたは片田舎に寓居いたして居る八代
の一族かてゝ加へて杖にも柱にも頼む源三郎は元和二年十一月
中旬からいたして痲瘡にかゝり一同の者も心配をいたしたが去
年に變る今年の有様充分の醫者にかけて手當を盡さうと云ふ事
も出來ず又一の心配で戸塚驛に住居をなす侯野玄亭といふ隣

大久保武藏鑑

を連れて參つて診察をさせるといふと玄亭首を捻り玄これは
痲瘡の内でも極性の宜しくないものでありまして大人參と云ふ
ものを川をなれば山を上げませんから一應お断りを申します
るの大人參を調合いたしまするは中々貧醫の吾々共の及ぶと
ころでござらん醫は仁術であるから何うかいたして御調合を申
し上げたらうござるが之は御一同の方々と御相談の上でなければ
不可せんと正直なる言葉であります
都の醫者と事變り体裁賣らぬ侯野玄亭が詞に又一之を聞きまし
て又やお醫者せんのお言葉でございますから包ますお話しを
いたしまするが此君様はこりや私しの爲めには大切な御方仔
細あつて御身分は申し述べませんが此お方の身の上は萬一の事
がありましては之にかりまするお女中方も兩方又敷なりませ
ぬ私しも死んでも生きてもおられん位い大切な和兒様何うぞ大

大久保武藏鑑

人參とやらを才覚いたして差し上げたのもんであります。先生にいたせば何程のもんであります。侯野立亭暫く考へて、立當今は人參が思ひもつかぬ高價であり、ますからまづ三十金もなければ充分に當をする事は出来まい。いと考へます、それゆへ戸塚あたりの田舎醫者の身分では力に及びません、まづ補に今日はお薬を六貼差し上げておきますから、てつけて上げて下さい、いまし其内に人參の御工夫が付きましたらば、其時は私に御沙汰を下さい、遅滞ながら差し上げるでございませう、併し成るだけ早い方が宜しうございませう、言葉死して侯野立亭は立ち歸つて仕舞う。跡は人參の才覚に主従三人胸を痛めました、が外に思案も工夫も、ない金澤の陣屋を立ち退く時に忙てふため、いて大事なものも取り落す位の現んや着のみ着のまゝであります、兩人の婦人も外に

大久保武藏鑑

術もなく三十兩の金子を持つて大人参とやらを求めなければ、手當も出来なといふこりや何うしたら宜からと世間を知らぬ家老の妻、又一人は小祿ながら八代家の愛妾お菊の方、別に思案も氣きませんから、先き立つは只涙ばかり、此時に彼お菊は、菊さ、て如何なことを申し述べますやうではあります、が田舎育ちの妻なれば、吾君様には變へられませんが、又お討死遊ばした殿様へ立つる操は、反古になるかは存じませんが、何うか妾の一身を此戸塚なり藤澤より飯盛り女に賣るともして、三十金の金子を調のへ、君にのうお薬を差し上げ度うございませう、それより外にお金子の出來やう工夫は、ございませんとお菊は涙と諸共に申すを聞いて、山中の後室、イエ、假令何様なことがあらうとも、貴女は大切なお部屋様、貴女の御身を汚しまして、金子を調へまするなと、いふことは、道において出來ません、良人角之進に對して、済まぬこと

六十六
でありまゝるが妻こそ假令操を破る其良人への云ひ理由は後日に
何うともなりません其女と違ひ此妻しは年も長けておりますか
ら逆も身を賣ると云ふ事も出来ずア一まゝならぬ世界でありま
するど濡り勝なる一家の嘆き此折僕の又一の家をば差し取さま
する一人の男あり 男又一さんお察かい之を聞いた又一が折
しと思ひましたから 又オヤ誰方かと思ひましたらば南郷の庄
兵衛さんでありましたか何れへ入つしやる一吹石し上つて入つ
しやいまし 庄ア一お前の家の門を通りましたから一寸寄りま
したよ何かお取り込みの御様子…… 又イエ類客が来ており
まして何うか一吹石し上つて下さいまし猿滑の煙草盆をくれへ
出す腰をかけて煙草バクく 遣つておりました彼旅人 庄ハ
又一さん失禮千万ではあります御病人がある様子で 又はい
親類の件を引き取りましたらが抱瘡で山が上りませんで今お醫者

様が返へつた所でございます 庄ハハアそりやあ困つたもんだ
何うもナト病症が悪いからお氣を注け下さいお幾位のお子
でございます 又九歳でグス 庄そりやあ何うも大事にしてあ
げて下さい…… 時に又一さん大層美くしい女中が兩人居ります
が……と小聲で云れ 又へい那の三五六になる大年増の方は
私しの御主人、それから二十二三になる那の品の好い奥様風の方
は私しのためには大主人、時世の習ひとは云ひながら據をころま
く又一風情の家にお連れ申してお世話をしなければならぬと云
ふ何うか庄兵衛さんお察しなすつておくんなさい

第八席

此庄兵衛といふは何者でありますかと云ふと南郷の濱邊にお
ります綱主で彼之人の世話などをいたしますのが好で小金も

大久保武藏鑑

立ち廻るし今江戸は開け初まりの繁昌のところであるから奉公
人其他の周施をしましてそれを江戸へ出しては幾分か口を
取るよ云ふ今日も己れの故郷からいたして多くの干物又は俗に
目差鮎と稱する之は南郷の名物で其様もものを積荷にいたして
海上から江戸へ廻し四日市の問屋へ送り自分少時は陸を廻つて色や
の用達をしてるの金子を集めて歸らうと云ふ少しは義侠心のあ
る庄兵衛でありませうから又一が難義の話しをば一々聞いて
そりやあ可愛想な事だねえ失禮ながら三十兩位いの金子なれば
金子を貸す理山には不可ない那の雨人のお女中の内一人を江戸
へ奉公に出したらば何うだい今のお前の話しでは戸塚か藤澤あ
たりの飯盛女と云ふことを云ひなすつたがそれじやあ金子には
ならならから何しろ今江戸の繁昌の初まりだ土一升金一升と云

大久保武藏鑑

ふ世界だから別けて女は賣れ口が宜い何うだい又一さん 又只
今其相談をいたして一同泣いておりますところでございます
が庄兵衛さん其女中の奉公口と云のはお心當りがありますか然
うして三十兩のお金子が取れますか 庄をりやあ取れねえたつ
て此庄兵衛が口を聞きやあ譯のない話しただけでも私は嘘はつ
かんが實の所は斯うだ今江戸に風呂屋女など云ふものがある
がこりやあ表向の遊女ではない垢摺女と云ふ名を付けた何風呂
何風呂と云ふものがあまづ早く云へば隠し賣女が黙許になつ
て居る様な形ちだが其方の道へ向くのもあるし又もうひとつ年
を少し取つた女のはけ口が無いと不可ないから昆丘尼長屋と云
ふものが出来て居るこれは表向昆丘尼をおくのだから何院何院
と云ふ院號がついて早く云へば伊勢屋近江屋と云ふところを何
とやら院とまあ云ふやうなお寺向まで女は一切昆丘尼たるを何

大久保武蔵鑑

と云つたつて坊さんになるのでは決してない此事に就いて哀れ
を話した大坂が落城して身分のある人の奥様だの生き存生らへ
てもう今になつて見ると呆痴未練だから死ぬにも死なれず流れ
て江へ来て今日の活計の種が無いから少し顔容の宜い
ものは此毘丘尼長屋へ身を沈めて情けを賣ると云ふ可愛想な話
しだ其所でまあ死んだ良人に縁が立たないとか何とか云ふ趣き
で表向をば毘丘尼と稱して居る宜いかい分りましたか此毘丘尼
長屋の最も繁昌するのは今江戸で八官町の大善院といふ家が
最も盛りだ主人の八五郎と云ふ人はこりやあ江戸ッ子も草芥
の江戸ッ子で中々話せる男だ欺されたと思つて何うだい那の二
人のお女中の内然う御決心が就いたらば一人比丘尼長屋へ身を
沈めたら三十兩の金子は其所から持ち上げてあげやうが何うだい
又それは何うも難有いことではございませすが私しから雨人の

大久保武蔵鑑

御主人へお頼り申す譯にも……と云ふ質朴なる又一であるから
思案をいたしておりました之を早くも聞き知りました山中の後
室御源三郎の母菊これ又一其お話しを横から取るに云ふのは
禮ではあるが今庄兵衛殿とやら仰しやつたことを委しく聞き
ましたが何うか其八官町の比丘尼とやらに身を賣つて三十兩の
お金子を拵らへ今にも危うき若君の御命の玉の緒を繋ぎ止める
は妾の忠義亡き角之進殿へ妾がお詫をしますから厚かましく
もこれ又一妾の身体を庄兵衛殿へお願なすつてはくれまいか
菊いえ〜假令何の様な事がありましても貴女を遊女にするこ
とは出来ません妾がうれは勤ます又一も鼻打かんで膝を進た
又それでは奥様決心下さいまし互ひに然う仰しやつて八しつ
た所が果しがございませぬ……庄兵衛殿右の始末故貴所御承知
下さい 庄宜うがすそれじやあ私に任してお置きなさい三十兩

大久保武藏鑑

の金子は今お渡し申しませうからと話しが纏つて此所で庄兵衛
三十兩の金子を又一とお菊に渡す其所で山中の後室は甲斐々々
しくも身支度をいたし御厄介ではありまするが庄兵衛殿宜しう
お願いしましませうと云はれて庄兵衛も 庄藏にお氣の毒様で
はありませうけれど然う云ふことにした方が却て早手廻しでござ
いませうそれじやあ何も彼も仰しやらすに私と一緒にお出でな
さいまし暇乞さへそこへに嘆くところも泣かずして見送るお
菊又一親子見返る山中の後室は南郷の庄兵衛と諸共に影取村を
跡にして戸塚を跡に程ヶ谷越へて神奈川へ一夜の泊りを求めま
して翌日の正午下る頃に花のお江戸に到着なし芝口から八官
町何しろ元和二年のことであるから江戸の様子も只今とは大層
變つておりませう山中の後室未だ名前は申しませんが之はおみ
つと云つた婦人で今年が三十七歳に相成る盛りは少し過ぎくは

大久保武藏鑑

居るが流石は小祿でも家老の妻品の宜しい何所から見ても奥様
の縮尻どしか見へません 庄此所が八官町の大善院少うし貴女
は其所に待つて居て下さいおみつは恥かしげに大善院の入口に
立つております 庄今日は…… 八誰方…… お南郷の庄兵衛
さんですか之はお珍らしうございますと奥から出て来た大善院
の主八五郎 八まあお上んなさい今日は商賣向かね 庄色々
の用を兼て来ましたが昨日南郷を立ちまして昨日は神奈川泊り
八はあよりやあ〜 氣の利いた所へお泊んあすつた何うです
え庄兵衛さん貴所にお頼み申しておいたか田舎種の何ぞ斯う通
りの好い品物はございませんかね生意氣な都育ちなぞと云ふの
は火が悪くつて不可ないがぼつと出の品の宜い種はございませ
んかな 庄その事に就いてお咄しがあつて来たんですが實は斯
やく云々であるに云ふといま之までの始末を掻い抓んで話しをす

大久保武藏鑑

る八五郎は大層笑盡に入りまして八「そりやあ難有う存じます
今日は少し宜い事があらうかと思つて居た事がある然う云ふ吉
事を聞きましましたがるれぢやあ何うか其代物を一つ見せて下さい
庄「宜しい……もし奥様……と云つても可笑しいがおみつさん
みつ「はい庄「まあ此方へお道へり遊ばせみつ「御免遊ばしまし
庄「これが貴郎にお咄し申した御亭主の八五郎さんと云ふ人お
近付におんななさい……八五郎少うし年は召してお出でだ
がまづ御色容は此通りこれこそ真正銘金無垢の奥様に違ひな
いんだから決して食はせ物ぢやあないお前さんの方が眼が高か
らうから何うかお世話をして上げておくんないまし
八五郎は始終の様子を斯う見てをりましたが八「まことに早や
いろくのの不仕合で斯んな事におんななすつたそりでございま
すが時世時節だ又宜いこともございませう人間と云ふものは思

大久保武藏鑑

やしいとか口惜しいとか悲しいとかその時死んで仕舞やあそれ
までだ命さへ保つて居れば又好い事がある貴女もまあ勤めだど
思ふと幸らいから極人を馬鹿にして氣樂に遊んで居ると斯う思
つておくんなさいましみつ「難有う存じます宜しくお願ひ申しま
す八「うりやあ然うと庄兵衛さん失禮ながら何か面倒なことで
もありやあ仕ませんかあ早く云へば悪足と云ふ様なものも庄
「そんな御心配には及ばないお武家の立派な奥様お連合がお隠く
れになつて之迄は後家を立つてお出でなすつたのだから悪足だ
の色男だの左様お氣遣はございません八さん御心安なさい八
「然うですか庄兵衛さんがお引受け下されば私しは大安心それで
は證文に仕ませうと云ふので此所で三十兩の金子を庄兵衛に渡
して證文をちやんと作つて八「まあ庄兵衛さん一杯上つて入つ
しやい庄「難有うございませぬ日の暮れない内に四日市へ往つて

大久保武藏藏鏡

用達しをすませ歸りに寄りませう……もしおみつさん何か又影
取村へ便りが仕たければ私が歸りに寄りませうからみつ難有う存
じます別に心掛りはございません何うか那のお子様へ少しも早
く大人參を差し上げて頂きたう存じまする

第九席

庄「その邊は又一が付いて居るから決して如才はありますまい御
心配には及ばない尙又私が歸りに寄つて宜い便りをお聞かせ申
しますからみつ難有うございませぬ何分宜しく願ひます茲で庄兵
衛においては自分が一文にもならない人の世話をいたして之も
所謂世話好四日市の問屋場を差して出て往つて仕舞う手持無沙
汰の後室お光 八「那のお前さんまあ奥へ一寸お出でございませ
今晝寝をして居た喚あが目が覺めたからお目に掛ると申します

大久保武藏藏鏡

から何にも然んなに心配をするには及びませぬ御殿奉公するよ
りも餘つ程樂、奥へお出でなさいまし 光「難有う存じます御内方
にもお目通りをいたしまして…… 八「其様に堅く云はれちやあ
賦に困るさあお出でなさい主の八五郎に連れられて暖簾を這入
り勝手の方大きな箱火鉢の前に立膝をして居る大善院八五郎の
女房之も夫者の果と見えまして三十餘りの大年増結び髪に黄楊
の横櫓といふ拵へで女房那のお前さんかい此方の家で稼いでお
呉んなさると云ふのは 光「はい女房「然うですか切望お願申しま
す御素人だと云ふことでございませうかなあにもう此道は教へな
くとも直に分りますからまあ此方へ来てお茶でもお喫りなさい
まし 光「難有う存じます御内方でございませうか何分何うか不馴
の事でございますからお願申します女房「實は二三日前まで宜い
奉公人が居たんですが身請をされて仕舞つて其所で大善院の家

大久保武藏鑑

は暖簾は掛つて居ますけれども玉は居ないんですところへまゐ
南郷の庄兵衛さんのお蔭でお前さんの様な上玉が来たよ云ふの
は本當に良人も仕合せだ何でございますかお武家の奥様で……
はあ然うですか訊いてはまあ可笑き事を申し上げる様ですが殊
に由ると今夜からお客があらば取つてお貰ひ申さなければなら
ない別に六ヶしい事はないのですお武家のお客と見たらば成る
たけ及物は此方へ預かつて仕舞う様にしてお客を二階に上げ然
うして酒肴でも注文をしたらばるれも宜し又泊る様事あれば
泊るやうにして……何にも譯のないこつてありますから宜うく
丁寧にして又追々跡はお歌へ申しませうから……お光において
は覺悟の上とは云ひながら萬一今夜にも浮れ込んだる客人が来
たなれば其時は酒の相手をすることは素よりのこと耻かしながら
を交して身を汚さなければならぬと云ふ此身は如何なる因果ぞ

大久保武藏鑑

と思へば堰き来る血の涙漸くに心を取り直して 光あゝ一今更
の様悲しむにも及ばぬこととはつと一息八五郎の顔を見ると
八あかねえお光さんどやら此遊女だの都て情を賣て世渡をす
ると云抑も女の來歴と云ものは昔は貴人高位の御方々が皆落着
れて然な者に成るといふ譯で源平兩家の戦に赤間ヶ關で滅亡し
た其平家に由緒ある女中遠花の妾も浪の底死んで仕舞へば夫迄
の事引き上げられたり助けられたりなまじなまなか死後れ生き
存生へた連中が今日世渡の活路が無いから其所で情を賣つて取
果ない世を送つたと云ふ赤間ヶ關の遊女は多くは平家の落人だ
と云ふ恰好貴女のお身の上庄兵衛さんも委しくは仰しやらぬが
儘かに大坂餘類のお方と此八五郎は見て取りました仕方がない
最前も云ふ通り最世時節だ嫌でもあらうが身を汚して又今日の
か歴々に身請をさるれば貴女の仕合せ此方の幸ひ今の幸若は樂

大久保武藏鑑

しき床の昔し語り花咲く春も来ませうから死ぬよりはまだ増し
だらうと諦めて餘まり涙を流さねえで莞爾々々笑つてお呉んな
せえましのう婢あ女房馬鹿な事をお云ひでないな悲しい事が腹
にあつて莞爾々々笑へるものじやあないがまあ追々に馴れたな
ら評のないこつたから何うぞお光さんお頼申しますと云ふ渡る
世間に鬼もなく大善院夫婦が思ひの外の親切
お光は憂きが中にも決心をいたしたと見へて其夜から客を取る
心組みをして居りました話して變つて其頃即ち大坂落城後元和二
年三年の頃の江戸繁昌と云ふものは實に話しにもならぬ位いの
景況で何事も開け初まりと云ふは騒がしいものでありますすが又
士農工商共に夫々心持が盛んでありまして別けて關東武士は天
下泰平の基は吾々の腕から揉み出したと云はぬばかりの顔色を
して俗に云ふ旗本八万騎何れも勇氣滿滿として少しも柔弱なこ

大久保武藏鑑

とはございませぬ其頃の旗本の有様と申すものは如何に侍の世
界とは申しながら鞍轡の大小を帯して肩に風を切り大道狭しと
肩胛を怒らして通行いたしたもので別けて御直參と稱する旗本
は夫々の組を立てまして三十六人を以つて之を一組といたして
其組々には色々名がついて居る甚だしきに至ると將軍の尻押し
と云ふものがある之れ將軍家を輔佐いたすと云ふ考へから割り
出したものでございませう其所で三十六人の一組が連月寄合場
所が極つて酒を呑み合ひ武を談ずると云ふ一寸した事がこれ吾
々は小蘇ながら駿遠三御譜代の堂々たる旗本だ徳川のお家が今
斯く隆盛を極むることも方々世の後ににお家に万一の事ある時は
お家と共に滅する覚悟然らば徳川將軍家と治亂興廢を共にする
吾々大祿を食する大名彼ものは降参不忠の武士である足利世盛り
には足利に従がひ織田盛んのは降参不忠の武士である足利世盛り
には足利に従がひ織田盛んのは降参不忠の武士である足利世盛り

大久保武藏鑑

には豊臣の身内と稱し、今徳川盛なれば只管徳川の鼻息を伺う之
を降参不忠の輩と云ふ、それは異なつて生死存亡を徳川のお家と
共にすると云ふ實は吾々は、大忠臣であらうかと思ふ、然らば切て
は吾儘氣胸に立ち働らき腕前の有らん限り腕力を振つて國の爲
めには命も捨て弱きを扶け強きを挫き義俠を旨といたさんけれ
ばならぬと斯う云ふ主意で押し廻るのであるから堪らない
今晚もどころは芝島森町二千五百石山中源太左衛門と云ふ旗本
の家にも不圖としたことか、落ち合つて三四人酒盛を初りました
が、其連中は何者であるかと云ふと第一番は大久保彦左衛門、水野
十郎左衛門、松平紋太郎、この三人である、前件に述べましたやうな
強い事ばかりを演説をして日の暮れるのも忘れて酒宴酣に相成
つた時に主人の源太左衛門が「源、最前使をやつたのに今直往く
と申した男がまだ來ぬがはて何したか」と云ふを聞いた大久保が

大久保武藏鑑

彦をい、山中誰を呼びにやつたんだい、待つ人と云ふのは何
者だ、い、源、な、外、じや、あ、ない、鎧、地の門跡前に居る松平左源太を
呼びにやつたのだ、直に参りますと返事を寄越して無禮極まる奴
ぢや、あ、ない、か、日、が、暮、れる、の、に、出、て、來、ない、此、言、葉、に、水、野、十、郎、左、衛、
門、が、十、い、や、山、中、左、源、太、は、幾、干、呼、び、に、や、つ、つ、も、來、ま、い、那、奴、來、な
い、理、由、が、あ、る、源、は、あ、十、此、頃、の、う、若、い、妾、を、抱、へ、て、其、奴、に、計、り
ぢや、ぢや、け、て、居、る、の、で、奥、方、が、大、變、に、倍、氣、で、騒、ぎ、だ、と、云、ふ、話、し、吾
同、士、に、は、無、い、こ、つ、た、な、あ、少、しく、天、下、が、泰、平、に、治、り、か、ゝ、る、と、御、膝
元、を、圖、め、て、頼、み、に、思、ふ、旗、本、が、妾、狂、ひ、を、い、た、し、て、柔、弱、に、な、る、と、云
ふ、は、怪、し、か、ら、ぬ、こ、と、だ、て、風、上、に、も、汚、は、し、い、奴、だ、源、は、ゝ、あ、し、て
見、る、と、妾、に、惚、氣、で、友、達、交、際、を、ぞ、は、缺、いて、も、宜、い、と、云、ふ、の、だ、ら、う
吾、々、同、士、の、内、か、ら、除、名、し、て、も、然、る、べ、き、奴、だ、然、う、云、へ、ば、此、間、道、理
こ、ろ、那、奴、の、顔、の、色、が、悪、か、つ、た、か、ら、左、源、太、何、う、し、た、か、と、聞、く、と、少

しく肺病の氣味だと云つたがして見ると肺病じやあ無い、那奴は腎虚を仕たんだらう事の事面白、大久保兄哥、お前も交際つておくれ匹人で、此所を引上げて左源太の屋敷へ往かうぢやあないか、查其奴か面白からう然うして妾にでれて居る邪魔をして正當潔白の奥方の肩を持つて間違つたらば其權妻を叩つ切て仕舞へ吾々の威光で……十夫が宜からう入らざるお世話ではあるが評議が之に一決いたして其所で主の山中が先に立ち水野、大久保、松平三客打ち連れ立つて燈火點きの頃からして鳥森町を出て築地へ往かんと差しかゝる所は名に負ふ入官町、夕暮方の群集は日でもあると思ふ位、四人は往來に立ち止まりまして、查これは大變お人込みだ、新橋の大通りの方を往こうぢやあないか、君子は小道に入らずと云ふことがあるこんな五月蠅い道は通らぬ方が宜しい

第十席

此時に山中源太左衛門が源お前方はまだ知らんか之は評議の比丘尼長屋だそれを見物の素見が出るのでこの繁昌殊に今夜は評判の大善院と云ふ家に大年増が見世開きと云ふ事、それで斯う込ひんだらう、紋君は大層委しいことを知つてるな比丘尼長屋の賣出ししまでちやんと心得て居るところは貴様も怪しいぞ色廓に委しい所を見ると左源太の事は笑へあいな、はつは、何しろ素見して見やうぢやあないかい、一同宜からう見ると放樂だ此所で四人の旗本が入官町の比丘尼長屋の新道へ大道狭しと這入つて来た夜目にも目立つ小白倉の椅、白柄の大小一様の打番にて還ましき姿、素見の連中が、うら来た、障つちやあ悪いぞ突き當ると新られるぞ旗本連中の氣狂ひが来たど小さな聲で東西

大久保武藏鑑

に分ける見世毎を素見して種々雑多の雑言を吐きながら途には
比丘居長屋を通り越して仕舞ひますると之から入官町を通り抜
けて少しく淋しひところへ來ると山中源太左衛門が源こう御
連中此所で少しく君等にお頼みがある私やあ跡から往くから藥
地の左源太の所へ先へ往つて呉れ玉へ三人が山中貴様は何うし
たんだ心持が悪いのか何故先へ往けと云ふのだ源先へ往けど
云ふ譯は俄に腹痛が仕て殆んど歩行に堪へかねる故に御性だか
ら何うぞ先へ往つて居てくれ直跡から往くから查そりやあ不
可ないぢやあないか左源太の家にも醫者があらう其醫者を招い
たら……源いや酒肴を始めやうと云ふのに醫者なぞを招くと
彌々不興で直々に行く一寸横町に出入りの醫者があるから一時
治しの服薬をして往くから切望先へ三君は往つて待てくれ玉
へ其所で朋友を勦はる連中でありませすから 十源太左衛門然う

大久保武藏鑑

云へば大層顔色が悪いぞ氣を注げて跡から來玉へ駕輿にでも乗
つて往つたら宜からう 源いやうれにも及ばぬ直向ふに醫者が
あるから此所に首尾籠く三名の朋友を尋いて仕舞つてべろりと
舌を出した山中道がは身分柄故若黨草履取を連れて居ります
若御前俄かの御病氣吾々も心配をいたします 源いや然んなに
心配には及ばぬ 若お醫者様は何方へ入つしやいます 源まあ
宜い汝達は屋敷へ先へ歸れ乃公は一人で宜しいから 若これは
又御前只とは違つて御病氣が起りましたと云ふのに往來に主人
を差しおいて立ち歸ると云ふは如何にも心元ないことで 源必
配には及ばんから先へ歸れ然うして用人共に然う云へ途中から
歸れと仰しやるから歸つて來ましたと云つておきやあそれで宜
しい今夜は夜が更けるから大方左源太の屋敷で百物照でも初ま
るだらう先へ歸れ 若左様でございますか山中の家來は不審

大久保武藏鑑

ながらも主命なれば烏森町の屋敷をさして歸る源太左衛門は
い所に立ち止まり源まづ朋友を計つて追ひ散らし邪魔になる
家來も追ひ返して仕舞つたこれから跡は乃公の一身志す所は
を然うだと獨り言を云ひながら忽ちの間に八官町の比丘尼長
家へ飛び込んだ亂棒な男があるものだ確にかるれと眼をつけた
三軒目柿の暖簾に大善院と染め出ししましたる一軒の家についで
這入つてまいつたが見世番と相見へまして一人が男入つしやい
ましお客様で入つしやいませすか源これ今しがたこれに乃公が
眼をつけておいた女今夜新見世を張つた評判の大年増と云ふの
は汝の家だな男左様でございませすお客様がぞろ／＼入つしや
いますのでお断りを申し上げるのに困る位いでございませす今晩
新見世の年増は一寸前から折悪しく病ひが起りまして抱へ主の
主人も大變に心配いたしてをります折角初日の事だから何うか

大久保武藏鑑

勤めて貰ひたいと思ひませす外縁の業ではございません何し
お客様を取るんでございませすから何うも病人では仕方がござい
ません今見世を占めやうかど云つてをります所で此通り皆押し
かけて入つしやるお方が新規の者を買つて見やうと云ふ思召で
ございませす源はあ左様かそれではまだ病氣故に客は取らんと
云ふのか男左様でございませす源官しい乃公が買つてやらう
……これ大勢其方共は幾干買ひたがつても不可んぞ今晚の
ところは身が客人に相成つて其方共には手をつけさせないから
指を隠へて引つ込んで居れ若い者大戸を下して仕舞へ
源金子は幾程何でも遣はす一寸目をつけた女であるから外の
者には出さぬ乃公が客だ身の丈六尺有餘にあまる色の眞つ黒け
な年齢は三十二三に相成る屈竟の武家道理なるかな鎗先で取つ
た二千五百石之ぞ即ち徳川お歴々の山中源太左衛門ついで上

大久保武藏鑑

に上り込んだ奥から大善院の八五郎が 八「これは旦那入しやい
まし今晚は少しく新見世の婦人が病氣で 源「いやそれは聞いた
病氣の趣は承知いたした乃公はその嫌味があつてまいつたので
はない少しく考へる所があつて之へ来た兎も角もその女に對面
をいたそう病人だからと云つて口の利けぬと云ふ程ではあるま
い違はしてくれ 八「へい 源「何所に寝て居る 八「いえお客を取
らないのでございませすから二階の静か所か所か寝かしておきまし
てございませす 源「宜しく 亭主案内しろ 八「何うぞ御前様何か
恐れながらお大小を此處へ 源「は、何か武家たるものは兩腰
を預けて往かんければならぬと云ふのか 八「左様でございませす
源「それは預けてもまいらうが小刀位いは宜さそうなものだ
八「それが何うも不可ませせん狂ひ水を賣ります所へ及物がありま
しては狂人に及物の警へ 源「馬鹿を云ひ然んなものと一緒にな

大久保武藏鑑

るか併し安心のため手前に預けるから大事にしる 八「長こまら
ました少し何うかお待ち下さいまし
大善院の八五郎は二階へ上つて来た 八「おい、お光さんや心
持は何うだい可哀想に餘まり心配するから病氣も出るのだが少
しは宜いかね 光「難有うございませす誠には相済みませんこと
ありませす晝程からお内儀さんからも色々御傳授を受けました
覺悟を極めた以上はお客様を御招待いたして御機嫌を取らうと
思つておりましたがお客様に差し込む持病の類、誠に大金を出して
頂きました身体でありながら何共申し譯がありません 八「仕方
がないそりやあ百兩百貫金子を出したからつて人は病の器だ大
事にしてお下さらなくつちやあ不可ないお前が嫌だと云ふから捨
て、おいたが醫者様を呼んで上げやうかね 光「御免遊ばしまし
少し気が落付くと治りませす合藥りを持參いたしましてございま

大久保武藏鑑

すから今に落付きますれば治ります 八「うりやあ然うとお前に
是非逢ひたいと云ふ立派なお武家様がある併も身分はお旗本お
光さん迷惑であらうが病人の事だから寝て居ても宜いそのお客
様に逢つて下さい 光誠に取り亂しておりますが 源「あー女中
苦しきあい夫へつかく」と参りまして寝て居るお光の面を打ち
眺めて居りましたが 源はて何うも彌々夫に相違ないぞ存する
こりや女中嚇驚くであらうがお前は八代越中守殿國家老山中角
之進殿の御夫人ではないか名前には知らぬが確かに覺へがあるだ
らうお前の方には御存知ないかお光はぎよつといたしました
光「はい何うして夫を御存知のして貴郎は……」 源「乃公か私は天
下の直參になつた山中源太左衛門だ七八年前にお目に掛つたが
お忘れかな此時お光は思はず知らず起き上り、病も何時か打ち忘
れて 光「おゝそんなら貴所は山中御一家の源太左衛門様でござ

大久保武藏鑑

いたしましたか 源「おーさ源太左衛門だ云迄は無れども山中一家は
甲州の名家、武田信玄以來黒保呂組と云ふ名代の勇士、御身の良人
山中角之進殿と斯く云ふ源太左衛門とは從兄弟同士、互ひに甲州
において勇猛並びなしまで人に云はれし名家の末も有爲轉變
の浮世の有様、武田家滅亡に及んで後悲しひ哉吾等は天下の直參
と成つて二千五百石の御祿、吾弟兄なる山中角之進殿は八代家に
附屬をして陪臣者と相成つて國家老となられし由、併し相互に
の繁昌を喜び居りましたが近頃八代家の風説何となく面白から
ず、先君越中守殿大坂冬御陣においてお討死又山中角之進殿は世
間はずで不慮の横死でも遂げられたかと云ふやうな事、此源太
左衛門も等閑にいたすのではない、篤と様子を聞き糺さん、八方
へ問ひ合せたが之とても誠を知るべき術もなく移り變る世の中
とは申せども山中一家の行末は如何いたされしかと明け暮れ心

に掛つて居つたが、七年前にお目に掛つた御夫人がこの有様は何事ぞ

第十一席

源「最前此所を通り掛り確かにうれと眼をつけ夫故にころ朋友に假病を使つて別れを告げ家來を屋敷へ追ひ歸して此遊女町へ入り込みしも御夫人にお目に懸つて事の様子を探らんがためである、角之進殿の妻君とも云はるゝものがこの零落方は何事ぞさる、さ一通り私しへ御物語あれよ御身隠すとても聞かすには置かぬ、義を以つて浮世に立つ公方の尻押組三十六人の内、山中源太左衛門己れが思案に餘ることもあれば、朋友は三十五人ある同士の力を借り受けても何事も出来ぬと云ふ事はないぞ御安心なさい、鐵石心なるところのこの一言にお光は餘りの事に難有さの涙拭

ひも敢へず、今までの病ひの苦痛は忽ち消へて失なり 光「さては御一家の源太左衛門様でございしましたか、今を去ぬる七年前お目通りをいたしたを夢にもお忘れ下さらぬと云ふはお嬉しうございます、殊に御深おのお言葉の段々實に暗夜に燈火を得たごも申しませうかお尋ねなくとも此方から一通りのお物語をいたさうと存じまするが、壁に耳徳利に口岩が物云ふ世の中ゆゑ……と主人八五郎の方を一寸横目で眺むれば、その意を悟つた山中が源「あーこれ亭主、假りにも遊女屋の亭主ぢやあないか女と客と話しをするに馬鹿を顔をして見て居る奴があるか降りる降りる八「へい畏こまりましてございます 源「大小を持つて来い 八「何うもお刀だけは御勘辨を 源「除まりびく／＼するな、錢せえ出しやあ宜からう早く降りる 光「御亭主さんお氣の毒様でございます、すが、山中の御前に一寸内所の話しがありますから 八「はい、」

大久保武藏鑑

大善院の八五郎、ぶつゝ、飄しながら梯子を降りまして、八「こゝ
鼻、大變だ、せ、今來た那のお旗本とお光と色々深ひ話しがある様
子、此方で様子を聞いて居やうと思つたら、主下へ降りると云ふ南
郷の庄兵衛さんが何にも悪足やあ無えから安心しろと云つたが
悪足が無えどころかい、選りに選つて旗本の豪傑た、三十六人組が
有る乃公で足りなければ三十五人仲間があるてんだ選りに選つ
てまわ初會に酷いものが飛び込んで來たせ何うも、病氣だなんて
云つたつて忽ちそりやあ治つた様子、あ、酷い目に遇つたなあ
女房仕方がないやね又宜いこともあるから然う氣を落すことも
なからうお前さんお酒でもお飲みよ、八「まわ仕様が無え酒でも
飲んで元氣を治さう
此方はお光が抑も此講談の發端からいたして引きつゞきました
る所の長物語り、落ちもなく申し述べるど一々聞いた源太左衛門

大久保武藏鑑

源「宜しいお前の良人角之進殿は吾爲めには從兄の角之進殿の
恨みも晴らして進せる其他前件の運の悪いものは曾世の中に出
して進せる、憎くい奴は越中守後室貞具院夫に續いて八代重三郎
當時の石見守また夫を知つて知らぬ振りする老中筆頭本多上野
之助、こゝ憎むべきの甚しき奴又それに次いて石見守に諛ふ家老
用人、一家中の不忠者、川つ端から退治てやるからお光殿御安心な
さい、それにしては氣掛りなは影島村の又一宅にある今癒瘡の患
者八代源三郎の身の上をば早く始末をしてやらねば相成らぬ、こ
りや急がしくなつて來たお光殿御身は大船に乗つた氣でおられ
よ、勤めなぞをさせる氣遣ひは、吾等は之から門跡前の朋友松
平左源太の所へまいれば、恰度兄哥分の大久保彦左衛門水野十郎
左衛門松平紋太郎松平左源太酒宴殿中此しを持ち込んで大久
保兄哥の力を借りれば、大次夫でござるから之からは安心をさつ

大久保武藏鑑

しやい、お前の苦勞心配も之迄ちや之からは段々宜い方へ向いて
 来るから安心なさい、明日にも又尋ねるから緩くりお前は氣を落
 付けて寝てお出で 光難有う存じます何共申しやうがございま
 せん、併し此所の家へは幾重にも氣の毒千万…… 源なに然んな
 事が構ふもんか元より不正の事をして居る大善院の八五郎……
 こりや八五郎 女お前さん二階で呼んで居るよ 八、祿おことち
 やあわりやわ仕めえど二階へ上つてまいる 源これく八五郎
 之へ進め 八へい〜」
 源この婦人はな容易ならぬ身分の者だ、其方共は何にも知らず世
 話人の口の端に掛つて夫を罵と思ひ金子を出したことだから仕
 方はないが大切の女をば賣物にいたすとは不埒、千万な奴である
 幸はひこの婦人が癪の起つたばかりで身も汚さず之のみが不幸
 中の幸ひと云ふものだ併し吾々共が斯く見出だす以上は確と出

大久保武藏鑑

婦人を其方に預けるから勤めをさせる事はならんぞ決して相成
 らんぞ万一無理に勤めをさする時は其儘には差しおかんから左
 様存せし 八「はい恐れ入りました 源之は大切なお上の御用の
 婦人であるから之からは奉公人扱ひには出来ん、三度々々臆立を
 致して美、食を以つて賄ひをして決して荒々しい事をいたしては
 相成らぬぞ病氣其外には充分手當をいたせりや亭主一つ 附違
 ふと吾輩上役人に申して不正の比丘尼長屋などは風上から火を
 付けて焼き拂ひ此の八官町を草だらけにするぞ 八何うぞ其義
 ばかりは御勘辨を願ひます 源拙者の名前は聞いたらうが芝鳥
 森町に屋敷のある三十六人組の山中源太左衛門とは乃公のこつ
 た 八もう存じております長こまりましたこれから此婦人を大
 切にいたします 源女と云ふものは口の多ひもんだ女房にも能
 く然う云つておけ 八女房ももう宜く心得てをります、何分何う

大久保武藏鑑

ぞお慈悲を願ひたう存じます 源其代り三十兩の金子は必らず
お上からお下げ金になるから 八夫さへお下けになれば私しは
もう翻らめす宜しう旦那様願ひます 源宜しい心得た然らば
お光殿お前の身体はまづ 落付いてお在るさい 光はい難有
うございます身を捨て、こそ浮む瀬の有ります私の身体、唯合
掌であります餘りの事に嬉し涙を止め敢へず兩手を合して山
中を伏し拜むろの体はいぢらし、ども警へ様なし、源太左衛門も
落つる涙を隠して面に泣を見せぬは即ち刺客の行ひ懸にはあら
ぬ名残をば双方互ひに惜しみまして色影を跡になし築地をさし
て闇の夜に只一人で急いで来て山中源太左衛門とんく、とん左
源太の門を叩く 門番へい誰方様でございます 源山中だ開門
せい 門番心なしましてございます、山中様か入り……きーい、門の
開きが明く、源太左衛門中に飛び込み奥へ來つて見ますと折節左

大久保武藏鑑

源太の屋敷は酒宴の真つ最中、此席におらぬものを悪く云ふとい
ふが昔しの人情で、彦いや山中か、遅く來たのう病氣は治つ
たか心配して居たよ 源、そりやあ御深切存外に運刻いたしたも
う今夜は何時だい 左、最早九つを打つた、もう來やあ仕まいと思
つて居たのだ 源、然うかろれちやあ三時か四時暇を費した時に
乃公の病氣と云ふのはそれは偽りだ怪病を構へたのだ 彦は、
あ大方ろんなことだらうと思つたよ何うも様子か變てこだつた
が全体途中で朋友を替いて作病を構へ何をして居たんだ 源、さ
其事に就いて話しがあるまわ一通り話しを聞いて何所までもや
れと云ふなら夫で宜し又諫止めるどころは諫止めて貰はう、貰は
力になつて貰ひたいのだ少し盃を止めて此山中源太左衛門が踊
るところを、睡で聞いて貰ひたい 彦、大か堅く出たな聞かう、
さあ暫んな當人の望みに任せて暫時盃を控へて、さあ聞かうと各

白跡を進めた
茲において山中が今晚の話し始め終りを残らす物語ると徹頭徹
尾分つたから一同大いに感し又涙を翻して山中の忠義を譽むる
もあり後家お光が薄命を哀れむもあり淫婦姦夫を罵るもあり老
中本多上野之助の専横を憎むもあり人心は様々であります稍あ
つて大久保が産山中流石は貴様だ最初から宜いところへ氣が
付いた之こそ本當の義侠と云ふものだそんなことなら勘辨なら
ぬ此の産左衛門初め一同の方々貴様に力を貸して盡力をするは
今日上への御奉公即ち大公儀へ御忠節と云ふものである宜しい
乃公が承知した一同は大久保兄弟が承知したとあれば元より
の事吾々も大承知山中出来したぞと譽めそやします、源太左
衛門莞爾笑ひ源然う譽められれば骨折甲斐があると云ふもの
だそれでは之から何から先へ事をなさうか順序を共々考へて下

さい此時大久保産左衛門はしりりと膝を進ませた

第十 三 席

産先づ第一着は夜明けを待つて上へ遠乗りの届けを出して鎌倉
八幡宮へ遠乗りを名として藤澤戸塚の間影取村百姓又一の家
ある八代越中守の幼息源三郎をば手當てをして江戸へ連れて來
ると云ふのが之一着就ては又其腹の菊とやら之も又手當をす
る次いで忠候又一の身体も大切なもの此者を願人として訴訟を
起すと云ふ凡て影取村の一條が手初めだそれから第二は八官町
の比丘尼長家大善院の八五郎と云ふ者に申し付けて山中の後室
光を引き上げて夫と影取村一件の者と一つにして悪人供の
氣の注かざる様などころへ當分の間隠匿つて面して後に臨機應
變の計事があると云ふものだ十「成る程夫が宜からうられかれ

大久保武藏鑑

ば之から手分をして組合三十六人の者一とつとなつて事を計ら
はうと實に渡候でありますから話しは此所に罷りました水
野は十夫に就いても山中、うんなに長く話しの掛る理由はない
が貴様今迄の間ろの山中の後家とやらと何か妙な事を仕ており
やあせんか、何かにこだわつて居たのじやあないか 源馬鹿なこ
とを云へ然んな源太左衛門ぢやあない、水野ぢやあ有るまいし蟹
は甲に似せて穴を掘る拙者なすは…… 十いや懸は思案の外と
云ふから一寸浮氣になつたかも知れない
其内に彼之八つの鐘が聞えましたから其所で遠乗の届けが濟ん
で大久保の頼みとして松平水野の兩人は築地の門跡前からして
直ぐ馬で東海道藤澤をさして乗り出しました兵は迅速を貴とむ
と云つて大層手廻しが宜しい其日の丁度正午下る頃影取村へ来
つて段々様子を見ると幸運なる哉八代源三郎抱瘡も大人参のお

大久保武藏鑑

際で山を上げまして折節醫者の俣野玄亭も来合して居て此道梅
では大丈夫と云ふことでございませすから一同喜びの眉を開きま
して残るところなく水野松平兩名の盡力に依つて影取村を引き
上げて八代の舊妾菊幼息源三郎陪臣吉田又一此三名のものを召
し連れて江戸表に立ち返り烏森川の一家の因みある山中源太左
衛門方へ預かると云ふ話しが纏つた時に江戸の方の仕末は大善
院の初五郎を呼び出し後室光を引き上げまして手當の金子は追
つて返済いたすと云ふことに成つたこれも山中屋敷へ引き取つ
て上向のことは大久保彦左衛門が擔當なし、爰に大久保彦左衛門
が考へましたるところ通常の訴訟を起した處がこりやあ尋常一
般の事では捌く事が出来な殊に本多上野之介と云ふ人は當時
勢ひ廣大にして飛鳥を落す有様流石旗本の勢でも大久保の
力でも此本多上野之介の鼻を曲て事をするには五年や七年の久

大久保武藏鑑

しき年月を費しましても遂には落着を見る事が出来ず、惡人彌々
願ふると云事が無いとも云へず、それでは口惜しいことである
と思ひましたから彦左衛門が深き考へは、こりやあ事その事手短
に將軍家のお成を待つてお成、先に於て御直訴させる方が近道だ
……抑も征夷大將軍に對して士農工商身分を論せず直訴いたし
たるものは罪の善惡を問はずして本人を重き刑に行はれる其念
の貫く事がある共本人は嚴刑に行はれると云ふ武家の規則であ
ります彦左衛門は心中に規則は規則又助ける方便もあらうと
う考へたから兎も角も將軍お成先に御直訴させて乃公が調べら
れるものなら一番調べてやりたいと斯く考へて山中源太左衛門
のどころへ寄り合つて只相談に月日を送つております内、其年は
空しく経つて仕舞ました
明くれば元和三年春の事太平の世打ち續きまして實に枝を鳴ら

大久保武藏鑑

さぬ御代の有様弓は袋に矢は箱に鑑兜は端午の節句に只見るの
み天に風舞ひ地に麒麟の戯むると云ふ堯舜の昔も斯やあら
んと思れました
前件述べたる如き天下は最も太平萬民腹鼓を打つといふ世界で
ありまして頃は二月の末征夷大將軍徳川秀忠公並びに西九大納
言殿と稱するのは後に三代將軍家光公の事でありまして武藏國
千住豊島王子邊へお成りを仰せ出されまして之を鶴お成と稱へ
ます將軍家年々一度づゝ自ら鷹を据へ其鷹を以て鶴を得て之を
京都に献上いたす長多も將軍家から一天萬乗の君へ献じ奉つ
る大切ある鶴のお成と申す去年元和二年は家康公御他界後將軍
忌中に在するに由つて御遠慮をいたされたと相見へる今年は正
月終つて二月の末と云ふ頃仰せ出され御旗本の面々も御代泰平
に治まりまして久し振でのお成ではあるし殊には御親子打ち遠

大久保武藏證

れ立つて下々では之を親子お成と云ふ位の大層なことでありま
すから當日は元和三年二月二十三日と相定まりお供割仰せ出さ
れました其面々には

- 御老中 板倉内膳正
- 若年寄 松平出雲守
- 御小姓お出役 三浦左馬頭
- 御使者 山口但馬守
- 御小姓 織田傳左衛門
- 御書院番頭 岡部志摩守
- 大番頭 永井式部少輔
- 御傍衆 松平但馬守
- 大河内甚兵衛 坪内惣兵衛
- 青山大藏太輔
- 松平式部少輔
- 阿部豊後守
- 剛力左近太夫
- 内藤上総介
- 神保播磨守
- 酒井下野守
- 小笠原壹岐守
- 菅沼道十郎
- 小倉内藏之介

大久保武藏證

- 御目附衆 土岐重左衛門
 - 御使番 櫻井城之助
 - 關東御代官 伊奈半左衛門
 - 御作事奉行 青山遠江守
 - 御勘定奉行 片桐石見守
 - 御勘定組頭 杉浦内藏之介
 - 南北町奉行 堀式部少輔
 - 御徒士頭 須賀金之丞
 - 御仲間頭 黒柳彦九郎
 - 御鷹頭 戸田幸助
 - 其他お供の面々 數人併せて一萬五千人、江戸鶴奉の御城よりして
 - 御親子打ち連れ立ちて早天より御鷹野であります、斯く行列を揃
 - へて豊島が原へ来りますと最早行列は御勝手次第、將軍家も若君
- 島田武十郎
 - 渡邊吉右衛門
 - 市岡小左衛門
 - 西尾藤兵衛
 - 加賀爪民部少輔
 - 高本善左衛門
 - 牧野新藏
 - 戸田久之助

も馴れぬ所の御歩行であるから面白しとあつてまだ二月の寒空
をも厭はせられず霜を踏んで山野を奔走遊ばすことは上つ方に
おいては珍らしい事であるから今日こゝろは相難き春の景色であ
ると御満足の体でありませぬ此時豊嶋の渡しの手前まで御歩行に
相成りませると大久保彦左衛門、鶴の目返しの股引、脚半、春割羽織
を一着なし切緒の草鞋に足許を堅め草履に平身低頭いたしてお
る所へ二代將と家つかくくと御進みに相成つて 秀彦左か 彦は
いっつ…… 秀先番大儀に存する 彦はいっつ、御道筋恐れながら御
案内奉つらんと彦左衛門御待ち受け申し上げました上様西九條
御親子御機嫌麗はしく渡らせられ恐悦至極に存し奉つりませぬ
秀其方も健康で目出度いのう、然らば案内いたせ

第十三席

彦左衛門などといふ人は身分は輕いが大層な人間でございます
將軍家と打ち連れ立つて野道をいろく話を仕ながら参る、外
の方々は容易にお側へまいることも出来ぬ何のお話しをする
か將軍家も高聲にお笑ひ遊ばしたりなんぞして彦左衛門も何か
戯むれて將軍家を笑はしてかひませぬ様子時に彦左衛門くすく
せいら笑ます 秀これく阿爺、最前から譯もなく何か笑つてお
るが何ういたしたか 彦いゝ何うもいたしません此事は元より
恐れ多いから申し上げますまい 秀いやそりやあ聞こう譯もな
く笑ふと云ふは無禮である、その笑ふ理由を云へ 彦いえ左様な
ら言上仕つりませぬ何うか上様お腹立なくお聞取を願ひたう存じ
ます 秀予は腹は立たぬ何だ 彦天下が太平に治まりませぬと
斯くまで人間が随分柔弱になるものかと私しもそれが悲しく存
ります且つは抱腹絶倒と申して笑ふにも絶へたことがあります

大久保武藏鑑

秀ふ、天下が太平に成ると人が柔弱になつて腹を抱へて笑ふと云ふそりや何である。彦、恐れながら東照宮様などは御晩年に渡らせられましたも御氣力健かに渡らせられ一朝お鷹野など云ふ時は御足元軽く総て山野を駆けて走つて御息も切れないと云ふ御自慢を遊ばしました。が今や恐れながら上様御治世は天下が太平なればこそ御足元重く自然の御運びも甚だ御柔弱の体に渡らせられます。それを彦左衛門お嘆き申します。総て鷹野と云ふものはいろく名は付けますが之は身分ある御方が平素疊の上ばかりに座つて居て美食を味ひ美女を愛し自から懦弱に相成つて遂には脚氣と云ふ悪病を踏み出しそれが爲めに大ひに人間が衰へます。するものであります。然るに鷹野と號して折々この大空を打ち眺め山野を奔走して青々たる樹木を見て勝手次第に西となく東となく駆け廻ります。自然と身体に運動がついて僅かの

大久保武藏鑑

病ひは無くあると云ふして健康の身体になるを人々が喜びます。已に今日上様の御歩みの体を見奉つるに餘程衰へ玉ひしと彦左衛門甚だ嘆息いたしをります。儀にございます。二代將軍之を聞き給ひ、秀、然らば予が歩き様が柔弱に相成つて氣に入らぬと申すか、阿爺、其方と駆けつくりをいたさう予に負けるな。彦、之は何うも御活潑な御事然らば上様と駆けつことを仕つりませう。秀、併し負けるも薬、鐘頭を予が打つぞ。彦、何うか御打擲に逢ひたくございません、あつは、さあ上様お支度遊ばせ。秀、云ふにや及ぶ、之から二代公は負けな氣になつた野道を駆け出す、彦左衛門眞つ赤になつて先へばつと駆けて往く。お側衆の面々は、甲、困つたね、彦左衛門と云ふ人は、乙、本當にさ、碌な事は云はねえ、せ、到、富、お上を勤めて駆つてを初めたお上もお上だ、極樂蜻蛉を見たいに氣樂に成つて飛んで入つしやる、笑ふ

大久保武藏鑑

こども出来ないから後れ馳せながら来ると此所は豊島の渡し場も遠く放れまして奥田と云ふ所へ来ります前には大河を控へたる王子わら一里ばかり離れたところでございませう奥田と云ふところには渡し場もありますけれども今日はお成先でありますから寂莫といたして邊りの農家では残らず煙りを止めて將軍家御成筋を蔭ながら拜見仕つると云ふ之を拜ひと稱へまして大した勢ひ然るに奥田から四五丁隔りました最とも淋しき一村茂れる森の木蔭よりこはそも如何に突然に恐れながら願ひ上げ奉つる「と聲高く呼はりましたのは二人の女に一人は幼年跡に下部体の者一人何れも大地に兩手を支へて唯願書体の者を青竹の先に挟んでふるく懐へながら之を將軍家の御前近く差し出しました將軍家之を見給ひ大ひに驚きの御氣色にて後に控へた彦左衛門を見返玉ふ

大久保武藏鑑

彦左衛門に對して 秀彦左衛門は何んであらう 彦はあ、恐れながら申上げます此者共は御直訴と存じます、御直訴とは表向き順序を追つて願ひましても中央に悪しき殺人あつて要閉いたし其願意も貫きませんと認めを注げますと身は重き罪科に行はれるも覺悟の上一人犠牲と相成つて願意を貫徹いたさせ度く借ころ此上もなき御方様へ御直訴いたしました事に候、其情最も感むべく不憫千万の事にございます 秀は、あ是は領主の非道代官の不束なるを訴へ出づる所がないから予の面前に直訴いたしたのであるか斯ふいふ事は如何取計つて宜しからうか予は未だ不馴れぬ事であるから 彦、御道理至極の御事に候、是は御代々に斯様な例といふものは是ありませぬ然し今を去りますこと殆んど三十年前東照宮御年左様さ四十五六……お五十格恰の時分かど心得ますが此彦左衛門がお供をいたして遠州千賀の浦と考ひまし

大久保武藏鑑

たが夫へ御鷹野を爲た時御直訴を爲た者があります果せる哉非
道代官の身の上を訴へ出でましたが東照宮の仰せには憐れむべ
き者であるから彦左取上げて遣わす方が好からうとの仰せ、あ
し御明君ある哉御採用あつて然るべし命を抛つて訴へ出でまし
た者でありますから何うか御採用になりませうと申上げまし
したらば御明君はお取上げになりました、夫れより外に右例と
いふ者はございませぬ、今日は恐れ多くも一天萬乗の君へ献上の
大切なる鶴のお成のお出掛けに斯ることに出逢ふとは遠州千賀
の浦の三十年以前を忍ばれます首尾能く御採用に相成れば、寛
仁大度の君の御恵み、彦左衛門共々に願上げ奉ります、彦左様
か、と將軍家御手つから青竹の先きなる願書をお取上げに相成つ
たは、つと日人の者は唯大地へ頭を下げて有難涙に暮れて居る
彦左、是は其方に預ける何んであらうな此願書は後に披見いた

大久保武藏鑑

すが何んであらう、將軍家御不審の体でお尋子、彦左衛門占めた
と思ひまして、彦左、此事は極く手短かに述べますれば武州久良岐
郡金澤の城主、其食祿一万三千石、矢代石見守が家の騒動、石見守少
しく筋違ひの事あつて、實兄矢代越中守大坂冬御陣に討死をいた
し、死人に口なしとあつて、石見守無理に家督を相續なし、實は先代
越中守に幼息源三郎なる者があつて、夫を保護する忠臣は横死を
遂げ、貞女は操を破り、實に不憫千萬なる其有様、依つて善惡邪正の
御判決を仰がんと畏れ多きを願みず御直訴いたしましたる次第
でございませぬ、秀忠公不審の眉を寄せ、秀親父其方は此書も見ず
に能く委しく知つて居るな、彦左は、あゝ大久保先生少しく息詰つた
が其所は、強情我慢の彦左衛門、彦左は、あゝ、恐れながら龜の甲
より年の功其所は大久保彦左衛門無學文盲には候へ共、世事學に
明るく是れ

百十八
しきの願書中を見ずとも斯んな事は彦左衛門早くも推量いたして居ります。……上様御察見を願ひたう存じます。秀面白の親父だ中を見ずして委しい事情を知つて居るといふは、兎も角も汝に任せる宜しなに取計へ。彦は、あ、恐れながら彦左衛門にお任せ下さいませるか。秀、悉任せる。彦御悉任下し置かれて難有き仕合せに存じ奉ります。……こりやお先手衆は、あ、彦上のお目觸も四人の訴訟人は軍編籠へ乗せて馬喰町御定宿へ預け遣はせ是は町奉行係りであるから……。大切の囚人手落ちのないやうに致されよ。大久保氏軍編籠の出来合ひはござらん。彦お黙んなさい天下は泰平何事も便利の世の中軍編籠の出来合もありません。お探しなさいは、あ、將軍家は御親子打連れ立つて御催しの場へお進みに相成る彦左衛門は跡へ残つて何呉れとなく指揮をいたして居りました。

第十四席

果せる哉軍編籠が王子の在から四挺来た、成る程大久保の云ふ通り便利の世の中軍編籠の出来合があらうと云つたが有つた不思議だ。掛りの役人が威服いたしました。が跡で聞くと大久保が読へて預けておいたんだ、それでは有る筈でございます。さて町奉行の堀式部少輔が四名の者を引取つて馬喰町の梅屋に申する御用宿へお預けに相成りまして之から彦左衛門が片肌脱いで八代家一條の事は御委任と云ふ廉を以つて善悪邪正を取糺す運びに相成ります。さて八代一件御直訴より引續き將軍家は還御の上大久保彦左衛門を御前へ召されて、秀、元來此一條は其方が委しく存じ居るやうに予も心得るが包ます事件を承知いたさうと輕からざる御

沙汰がありせしたから其所で彦左衛門 彦恐れながら其事は只
今詳らかに言上いたさんと存じ居りましたるか抑も此原因は斯
様々々云々中度は斯の通り終りに至つて遂には上様の尊前を登
かせ奉つる次第に至り何共恐れ入りましたることでは御座いま
するが何れの道に絶る所もなく御訴へを起す力もなく止むこと
を得ず進退此所に谷まりましたるもの共の御直訴と存じ奉つる
間其罪は後と遊ばし一旦は御取上候へば願人一同も大威至極に
存じ居りませう元より等においては一命を抛つて八代家再興
の儀を願ひ出でましたるものでありますから此上は唯々御哀
憐の御賢慮を仰ぎ奉つりますると彦左衛門が抑此講談の起り立
つ所から御直訴までの手續を落もなく申上ると賢明なる二代
將軍家でありませうから暫らくの間お考へあらせられましたが
秀聞き届けた併し彦左衛門輕卒に事を取扱ひ公儀の取にならざ

る様其掛りは汝へ申し付けるから老中共一兩名立ち會の上御前
吟味に取り掛つて然るべく殊には老中筆頭本多上野之介の身の
上にも係はる事であるから宜くくゝの邊の所へ思慮いたして
万事心注げて取り計らひ然るべく存する 彦は、つ誠には有き
仕合せに存じ奉つります向又尊意を煩はせませうなことは誓
つて仕らす仰せの通り多くの人々の迷惑に相成ることゆゑ尙穩
密に穩密を加へ充分に探偵を致しまするでございませうから恐
れながら尊意を安く思召の程願ひ奉つる之から彦左衛門一旦
屋敷へ引き取りまして尙夫々の手續きを段々調へ上げましたる
所彌々夫に相違ないと思ひ決心をいたしましたから尙改めて老中立
會の義を願ひ上げました爰で彌々この事件が吹き上げ御評定所
の吟味と成り思ひの外八代家騒動が盛んに燃へ立つてまいりま
した此時に本多上野之助でありますが抑御直訴の日よりいたし

て上野安き心もなく其身は老中筆頭職でありながら軽々しく御前に出で、鬼や斯う言上などいたしては却つて辯護を致すに似て將軍家の思し召しも如何であると思ひましたから何事も云はず打過ぎましたのが彌々公聴に達すると云ふ時に臨んで最早捨ておかれませんでしたから上野之介密かに飯田町中坂の八代石見守尙又真真院此兩人に目立たぬ様にして夜中参れと云ふ沙汰をいたしたから大ひに驚きまして真真院石見守の兩人は其夜の内に西丸下の屋敷へ忍んで参つた斯くと取次の云ふを聞き上野之介待ち設けた事であるから早速奥の間へ通して兩人に對面をいたした例に似合ぬ上野之介は顔色不平の体でありましたが、男女兩人は睡んで控へて居ると暫らく立ちまして上野之介申すには上さして其方共も兼て傳に聞き及んだであらうが先達上様お鷹野御成御出張先へ御直訴をいたし候者あり右は八代家に大關係の

者共にて一旦はお取り捨てにも相成るへき所を傍らに大久保彦左衛門まかり有つて例のつべこべと口を出し遂に其事公聴に達した上野不日に吹上御評定所に御評定を御開廷に相成り過般の諸士老中共立會彦左衛門吟味掛り仰せ付けられ候の趣然らば其方共兩人は逆も逃れべき道はなく必らず其席に呼び出されて彼老人が猛烈なる戦場風の裁判をいたすかも知れぬ宜く兩人も心得て居らねば相成らぬそれに就き此程はこの上野之介すら寝食を安んずる能はずと云ふ位いの次第併し出来た事なら如何共いたし方はないから此上の用心が肝要である筈と思慮を巡らさねば相成らんぞ石見守真真院兩名の爲なればとて縦令親子の仲とは云へ法を曲げると云ふ事は出来ぬが又々取計らひ様もあらうから篤と熟考いたせと子に甘きは親の常

大久保武藏證

兩人ははつと平伏いたして暫らく言葉もありません流石は男だ
け石見守顔色眞つ青と相成つて膝を進ませ石恐れ入り奉つり
ます私共の不所有よりいたして公儀尊徳を驚かし奉つり又
上にも大切ある所の男君をも煩はせさすると云ふは何共不孝至
極のに事ささいます眞眞院も傍らより眞父上にお目通りをい
たしまするも耻かしき此身の上面目次第もございませんと涙に
暮れておる其体を見て上野之介が彼等密通をいたして居るに違
ひないと云ふ事は早くも察見いたしなしたから太息をほつと
吐きまして上まづ兩人共何と心得て居るかは存せぬが御評定
所の第一着に汝等が年若き身分にて一とつ所に住居をいたして
居ると云ふは此個條に就いて不義ならずと雖も不義者なりと
見做されても如何共詮方ない石見守兄の家督を受け闘いで八代
家相続いたした以上は相當なる妻をも設け別間に居らねば相成

大久保武藏證

らぬ然るを幾月か更に縁談の噂もなく若き者が一室いたして居
る此事の調べを受たる時は何と答へる元より不義密通と申する
者は形なくいたして人に見られさへしなれば云譯の立者であ
ると云ふ證據あつてなきも同様然らば密會はいたしませぬと云
ふ確といたした證據あれば此の一條に就いて八代家騒動も忽ま
ち取り消しに相成る彼等は無根の訴たへを起したと云ふ塵を以
つて却つて罪を受け彦左衛門も己が善度に相成つて汝等兩人は
安泰になる策もあらうと存するが只不義密會をいたしませぬと
云ふ證據が一つ欲しいものであるか石見其方は考へが着いたか
石見守少時考へておりましたか石委細承知仕つりませした只今
石見守切腹いたして申し理由をいたしたところ折角相續いた
した八代家の家名が立つと云ふ事は覺束なく又姉君の御身の上
にも係はりまする事故男君如何なことを申し上げるやうではご

さいまするが私し非常の決心をいたしました一命を捨てる覺悟
で事をなしましたらば私しの安泰は計りませんが八代家々名の
ことは無事、又姉君の御尊体も傷付けず八方四方それが爲めに程
能く治まりませうかと存じまするが如何なるものでありませうか
上は、うろれが爲めに安泰に治める策がある云ふそりや不義
でない云ふ證據を現はすと申すか 石御意にございます
上其方が切腹いたする覺悟で……左様か 石御意にございます
遺は好智に長けて居る本多上野之介正澄であるから早くもそれ
と悟りました 上は、あ左様かな併し非常手段が行へるか其場
に至つて卑怯なことをいたしはしまいか 石決して御心配御無
用篤と姉君にも御相談いたして八代の家には替へ難うございま
す 上宜し云はす願はず大抵分つた然らば夜は更けるから兩人
共に歸邸に及んで篤と貞真院にも相談いたせ」と云ふ焼野の雉子

夜の鶴子故に逃ふ親心流石本多正澄も兩人の身を思ひ遣り涙は
離しませんが役屋敷を歸してきつと思案に及んで居る、兩人は之
より立ち歸つて非常手段を行ふと云ふこは如何あることである
か一寸……

第十五席

却説も其翌日に至り八代石見守急病の趣きで其筋へ届けを出だ
しました夫が爲に折角待儲けてある吹上の御評定所も一旦中止
に相成り流石の彦左衛門も大いに落膽をいたして其他訴人一
同も何うなることか心配をいたしましたら彦左衛門は却つて
石見守の病氣届けをば考へ直して彦左衛門は如何なる謀計
があるかも知れず本来なれば悦んで評定所へ出頭いたして其身
の潔白をば明かに現はすべき所を今日に至つて病氣引込みの届

大久保武藏鑑

けを出だすと、は彼が罪惡を願はずやうなものである。此上は譬ひ如何やうな謀略を巡らすとも又本多上野之介といふ權家が跡を退くとも固より邪は正に勝たず關係の若も左のみ心配するに及ばんと思ひ直して彦左衛門も魚慮つたくは思つたが石見守が全快届けを出すのを相待つて居つた。然るに十日程立つても何んの沙汰もありません。香青山大藏太輔方へ罷り越して御用談の趣き申込む早速對面をして彦左衛門が申込むには彦左衛門様よりいたして輕からざる。沙汰拙者へ吟味仰せられたる八代石見守一條上様も出御あらせらるゝとまで取締り居る辰の口評定の一件、然るに肝心の石見守病氣届けを出だしたなりで今日まで十日間何んの沙汰もななく又お係りの方々も一向に其事を忘れた如くに打捨て玉ふといふは甚だ以て其意を得ず人は病の器であるから吾々とても今日

大久保武藏鑑

斯く健康でもいつ病氣になるまいものでもないが病氣届けさへ出して置けば幾日でも引込んで居られると思ふはこりや平人の身の上にあること抑も石見守御嫌疑を蒙り公廳に出頭いたせといふ御沙汰まで是れあるに病氣といつて十日間を棄置くとは其意を得ぬかと心得る早速彼の病症御見届けの上夫れの手續きもあらうかと存する足下等の思召しは如何である。斯く青山様へ對して申述べると大藏大輔も成ほど足下のははるゝ所道理至極等閑に棄置いたるは當職の誤り速かに石見守病氣見届けの爲に公儀役人の内を差向けるでござらう。彦、いや、然ふなくて、は叶はぬこと取急いでお運び下さい。大、委細承知いたした。之から公儀からして八代石見守病氣見届けの爲とお目附を差向けられました。斯くあらんと覺て覺悟の上であるから石見守今更病床にあつた

大久保武藏鑑

といふ体で顔色蒼醒めまして取亂したる姿でお目附に對面いた
しました石見角に全快といふには至らねを公儀より御沙汰を
蒙つて居る身分であるからはや一兩日経過いたしなば出勤届け
をいたさうと存じ居つたる所返すもお手敷を相掛け相濟ま
ざる次第宜しく御取計ひを願ひますと申述べた流石はお目附
であるから其体を見るに全くの作病にもない様子であるから、病
症見届けの上老中月番へ此段達しました斯の如くの次第である
から石見守なかへに心も安んぜず然し都合も好いと見えて病
氣全快の届けを出して猶上の御沙汰を相待つ斯る事は寛やか
なすべき事ならずと翌日早速ながら吹上御評定所を開く石見守
當日に至つて早朝に出頭をいたしましたさて御評定所上段御座
の中には二代將軍秀忠公御内見を遊ばす是を御際見と稱へます
中々徳川時代に減多にはない晴がましき所の裁判でございます

大久保武藏鑑

老中立會は板倉内膳正、青山大藏太輔、本多上野之介は老中筆頭で
はあるが是は八代家と一族の御用掛でありますから遠慮いたして
此席には今日出ません其所で臨時御用掛りは大久保彦左衛門、是
は固より助言役といふ一つの役がある助言役といふは先代家康
公より命せられ斯ふいふ人が當時三人あつたといふ、三人とは講
であるといふと即ち大久保彦左衛門、品川東海寺の開起澤庵禪士
今一人は南光坊天海
此三人の方々は臨時に出頭して天下の政事向き口出しをする
ことを許されて居ります則ち助言役去れば閣老三政も是には一
目置て居なければなりません殊に此度の評定所は將軍家より台
命を蒙り彦左衛門に係りを申付けるぞ老中共立會へといふ鶴
の一翼、由つて彦左衛門の身体からは五光の差すやうな勢ひで
さいます御座の中央に控へて泰然といたして居る其他係り役人

大久保武藏鑑

の連名は夫れくありますが是は略します、御評定所御様側の上には武州久良岐郡金澤の領主一萬三千石八代石見守病氣とあつて餘計奪れて居る、帛小袖麻上下着用にて及んで控へて居ります其傍らには前代越中守が未亡人真真院最と神妙に平伏いたして居る、様側末席には當年九つに相成ります幼稚の八代源三郎、評定所白洲には先代越中守愛妾菊、越中守國家老山中角之進未亡人當時比丘尼妙善と改名いたして居る四十格好の女、是も控へ罷りある遙かの末には若黨吉田又一、此度御直訴の願ひ人砂利の上に願を下げ居ります

大久保武藏鑑

御直訴をいたしたる段輕からざるの大罪人、然れども格別の御慈悲を以て其罪も問はせられず却つて願ひの趣き御採用になり御評定所をお開きに相成ると申すは高大無邊の御仁徳太平の世の有難さをば愚昧の者ども、能く考へて國恩を忘却いたす事一同へえ……」

たしたる後は速かに相當なる妻をも儲け兄嫁と其境界を正しう
いたして別問いたして居らねば相成らん然るを長年の間だ一室
に座を構へて夫婦同様の所業をいたして居る段こりや十目の見
る所十指の指す所夫も下々の裏店小店に住居いたする者とは事
異り荷も一万三千石の諸侯ではないか殊に聞く所に由れば貞真
院が先代越中守に嫁入りいたした時に實家方本多上野之介より
いたして三千石臺所贈ひといふものを持参いたして参つたとい
ふして見ると彌々別室を構へて多くの侍女にかしづかれ御後室
様で安泰に居られる身体にありながら何故若き者が一室いたし
て居るかは以て不義者なりといはれても申譯が無では無か能聞
けよ其方共越中守とは骨肉同胞の兄弟又貞真院へは故越中守は
大切の良人ではないか其大坂の戦死を聞なば寢食を忘れ歎かな
ければ相成らぬ却つて是を悦ぶが如き趣きあつて間もなく家督

相續仰付られ石見守と改名其後汝等は夫婦同様の交際をなして
居るといふいよく不義密通をいたして居るに相違ない然らば
慾に限りのないもので何卒永世夫婦に相成らんといふ淺果敢の
心よりいたしてたましく忠臣山中角之進といふものが血統の男
子のあることを申述べて家督評定の反對倫を起した時に角之進
を密に暗殺いたし然して金澤の陣屋へ打手を差向け大勢の者を
殺さんと謀つたのであらう

第十五席

彦然れ共其時は善人を助ける神もあいことか忠臣の者は皆何れ
かに漂泊いたして既に乞食同様の身と相成り訴へ出るに所もな
く恐れをも顧みず上様御成先を驚かし奉つたりと云ふ次第皆其
方共の不所存より出たること其不所存と申すは若き者が一室同

大久保武藏鑑

居いたして不義密通を働らき色情より慾情に渡りるれより人倫
を忘れたる此度の始末一を以つて万を知ると云ふは此事最早迷
るゝ所はない速かに罪に服し八代の相續人は那れなる幼息源三
郎を以つてお立下されど何故尋常に嘆願いたしては出でん、さ重
三郎、貞真院恐れ多くも上様出御なるぞ、不束なことを申すな速か
に服罪いたせと大音聲に戰場において號令をかけるやうある蓋
左衛門の音聲、御評定所に鳴り渡り他の者皆耳を聳するばかり
此時に少しも騒がぬ石見守貞真院の兩人差し俯向いて居りまし
たが稍あつて石見守面を上げまして石「恐れながら石見上申仕
ります、今日お調への次第石見守毛頭存せぬ事、第一國家老山中角
之進反對論を起せしとあつて之をば暗殺いたしたるの御嫌疑は
誠に迷惑至極のこと之は山中角之進朋輩共と酒興の上口論に及
び遂に決闘に相成り飯田町八代家上屋敷隅の長屋において及傷

大久保武藏鑑

の上、殺害されしものと存じます然れども殺したものは何者か
唯跡々の説に止まりまするのみ、然るを角之進若黨吉田又一
なるもの如何なる所存か金澤の陣屋に立ち歸り彼より求めて
動を起し穩やかならざるの趣でありますから鎮靜の爲めに家來
を差し向け手向ひ仕つり候者は止むを得ず打果しました、其後何
事もございませぬ然るに右打洩らされたもの金澤より何れかに
落延び此度上様御成先において御直訴をいたしましたるの段、其
原因はと申すれば斯申す石見守一身上より起しましたる不束、其
ころは何共御詫を仕つりますなれども私し兄嫁貞真院と不義密
通を致し色情より慾情に渡つて云々と云御調に御座ますがこれは
少しも覺へのないこと、天地神明を誓つて石見守夢にも存せぬこと
宜しく御察見を願ひ奉つる蓋、黙れ……何だ天地神明を誓つて
身に曇りははないなんて淺果果なる所の申し開きをする鼠だ、併し

大久保武藏證

石見余事はいろく混雜いたして居るから追々に取り調ふるとして其枝葉に渡らず大体の取調べをいたす貞真院と密通いたしてとる事はこりや鏡に掛けて見る如くそれを其方は驚を賜と云ひ争うか石「恐れながら之は彦左衛門殿御吟味ども存じません密通いたして居るは鏡に掛けて見る如くとは何事當人の指者が密會の覺へがないと申せば之は明白それを強いて不義者なりと仰せられますは甚だ迷惑至極彦これく不義をいたしたと云ふ證據があるから何様の取調べを受けるも知らぬと云へばそれで済むと存ずるかこれ上にはな強つて強情を張れば半問ひ掛問と申する呵責を與へる道具もあるぞ併しそれは平なる所の輕き者を取り調べる時にかくるもの荷くも其方も詰候の一人八代石見守ではないか左様な攻道具に掛つて呵責を受けて白狀するとは不本意至極のことであらう不義は一人で出来るもので

大久保武藏證

はない、夫に控へて居る貞真院其方も堂々たる天下開老の娘ではないか攻められて後に白狀いたして服罪したと申せば里方の恥辱にもなるであらう不義密通の證據なしと申せども證據は明かに上つておる事をば飽くまで陳じ偽はるか不届者奴が「彦左衛門大喝に責めかゝると石見守の勢ひ益々強く石「あいや然うか叱りのみにては甚だ迷惑至極仕つる、不義密通の證據は何れにございますか、私し方にも正に致さぬと云ふ證據がございます彦「ふーむこりや面白い、密會はいたさぬと云ふ證據があるか」彦左衛門は眉を進めて彦「其證據とは何んである石「今日不肖石見守成たけ御場所柄をも憚り此事は申すまいとは存じましたが今は私一身に拘はりますること故止むことを得ず恐れ多きをも願す申上げますが元來私し儀は幼少より佛門に志し深く夫れも惣領に生れし身分なればこりや親の跡目を相續いたさねば成

大久保武蔵燈

りません。が、次男に生まれたるから、兄越中守が御忠節を盡し家も安泰である以上は、此身は他家に養子にやられる身体、養家を頼りたすよりは、佛門に入つて一と修業仕りたいと存じ、此望は二六時中絶へません。さるからに十七歳の頃、覺へました色情の念を立つたるなれば、名僧智識の仲間入りも出来やうかと存じました。此身學問未熟に候間、九牛一毛は一身を清淨にいたしたき望みより、憚り多き事には候へ共、羅ひいたして五体不具でございます。五体不具なる者が密通が出来ませうか、いや、嫂に拘はらず何やうの婦人に配偶いたするとも男女の交際の出来べき所以は無之く是が一つの證據かと存じます。這は申上げ兼ねました。次氣なれども最早、絶体絶命の場合、憚り多き御場所柄をも願ふの暇なく事、情御感察を願ひます。と、滔々と述立てました。

大久保武蔵燈

は佛門の志し深く十七八歳の頃俄かに羅切いたして、器械はないといふか、ふむ……僞りではあるまいな。石「此期に及んで僞りは申上げません。彦「宜しい……お目付衆は、あ彦「お醫者方立會の上石見守をお驗め下さい。は、あさあ何うも徳川の御世始りまして以來、御評定所の一大珍事であるが、笑うことも出来ず顔と顔を合し合しまして、餘りのことに唯呆れ返つて控へて居る、役目あれば是非に及ばず當番の目附衆二人夫れから御醫者方一人都合三人御評定所の左りの方の休息所白張のお障子の影に石見守を召連れて展風かこいにして改めました。が今の時間なれば凡そ三十分。一同以前の席に着く石見守も情々と爲て着座に及ぶお目附雨人お醫者から彦左衛門に對して石見守全く羅切いたして居りませ彦左衛門さよつと爲た彦「ふむ……彌々器械はないか、ありません

根元より美事に切斷いたしてございます 彦、お醫者方見誤りではあるまいな「いゝゝ」見誤りではございません 彦「何かい、昨今切つた痕ではないか」御意にございます、八代石見守唯今の言葉に十七八の頃と申されましたが然らば七八年経過いたして居ります傷口も左の通り傷口に古びの付いて居ります様は如何さま七八年は経過いたして居るものと見へます 彦「ムーむ必ず見損じはあるまいな」なか「大切の事故確と注意をいたしましてございます 彦「はてあ……さしも剛情我慢の大久保彦左衛門も暫くの間考ひて居たが、すると此時青山大藏太輔お進みに相成り 彦「大久保彦左衛門 彦「はつ 彦「上意 彦「は、あ 彦「彦左衛門 何事に由らず事を輕率に心得え既に今日の始末、八代家裁判の次第尤も粗忽千万の事と上様甚だ尊意に叶はず當人に隨儀を申附け追つて御沙汰を相待てとの事、右に付八代家一件の者共盡く一

且は退出を命せられ追つて御沙汰を相待てとの事、左様心得ませえ 彦「へゝゝゝ是非に及びません慎んで御沙汰を相待ちまするでございませう 青山上様御……」といふ是からいたして御本城へ御歸城に相成る、其跡はばたばた「運びが付いて参りまして折角願ひ出でましたる一件關係の者は元々へ皆嚴重に御預けになり石見守貞真院の兩人は上々の首尾で御評定所門前より駕籠に乗つて飯田町の屋しきに歸る、馬鹿を見たのは大久保彦左衛門終ぞないこと閉門といふお咎めを蒙りました

第十七席

駿河臺錦小路の屋敷は其日の内に青竹を以て門戸を嚴重に締りを付け人の出入を禁ずるといふ彦左衛門一代の失策、何うやら八代家の一件も是でお流れに相成るべきでございました、承知し

大久保武藏鏡

ないのは其組下に屬したる旗本の面々でございます、毎度く旗本が大久保の屋敷に至つて密かに面會を乞ひ御評定所の顛末を聞いて齒噛をなして口惜しがり残念至極と悔みを述べて歸るもあり又ははやり男の血氣の人々は是は老中本多上野之介の奸策に出でたる事であるから逆も口論なぞでは無益のこと、上野之介屋敷に押して往つて充分に彼をば取押へて呉れんといふ人々もあれば又は八代へ亂入して姦婦姦夫の兩人を押へて辛き目を見せて呉れんといふものもある千差萬別、人心は様々であるが詰る所は彦左衛門を助け其義氣を感れみ失策を悔みまするの外はございませぬ實に餘程の騒ぎになつて來ました
去れども彦左衛門大いに熟考する所があるから見舞に來つた人々を諭し 彦いやく／＼天は明かに照すものである、頗ては此耻辱を雪いで無念を晴らす時節もあらうから先づ先づ各々方神妙に

大久保武藏鏡

爲て下され、今懲じいに過激の事をなし玉へば彦左衛門の爲を思つてして下さることが却つて害に相なるから、上様もなか／＼一通りの大將にはわらず東照宮の御氣象を帯びてあらせらるれば一旦は彦左衛門をえら非道くお叱りなすつても實は惡人共に氣を許させん思召しなるやも計り難い淺果敢あることを爲て下すつては却つて上様の思召しに背くに由つて何うぞ立腹がすに神妙にして下されと平生に似合ぬ彦左衛門穩庵柔和のこをいはれて彌々益々謹慎いたして己れの家からは買物の人さへ出さぬ位にいたして居りました
去れば家來一同高聲もせずには隠んで居た、昨日と立ち今日と過言まする内に元和三年の秋も経ちはや冬枯れの姿に相成りましても今以て閉門御免といふ沙汰も出ず彦左衛門鬱々として日を送る内に一夜のこど駿河臺錦の小路の大久保の屋敷の門の潜りを

大久保武藏燈

こつくと小さく叩く者があります門番が小聲で誰方さまでございます男水野十郎左衛門だ門へゑ一是は水野の御前でございますか少しお待ち下さいまし十郎早く明ける此所に立て居る内にも人が見ると不可いから早くして呉れ門畏りました是から用人の所へ門の鍵を取に参る大久保の氣に入りの用人從尾喜内是を聞いて喜なに水野様か……然か夫じやあ乃公が出やうと云つて喜内が來つて靜かに潜りを開いて喜是れは水野様でございますか十を、從尾喜内か出迎ひは大儀に存する喜へゑお出迎ひと申する次第ではございせんが、さ何うぞお遣入りを願ひたう存じます跡の掃りを付けて喜能く御前入しつて下さいました十どうも氣になつて仕やうがないから今夜もまあ五月蠅か知らんが來ましたが何うです兄貴は相變らず寢て居ますか喜いえもう那の通りの氣風でございますから此程は

大久保武藏燈

焦慮てく奥方やお娘子又私し共にまで無理を仰しやつて困ります十然ふだのう、あゝいふ氣象の人だから定めし焦慮も來るだらう、まあ少しの間何うか機嫌を取つて居て呉れる、とれ奥へ往つて違ひませう喜御案内申しませう喜内が奥のひと間へ來つて斯くと申すと彦左衛門の悦びいわん方なく十郎左衛門が奥へ來つて見ると氣のせいに行燈さへも暗らく屋敷が何となく陰氣のやうに思われる彦左衛門が彦いや水野かやう來て呉れたなあさ、此方へ……妻をや水野様入つしやいまし家内も夫れに挨拶に出る茶煙草盆が出来ます十決してお描ひ下さるな、度々参つて御迷惑ではござらうが何うも氣になつて仕やうがないから夫で來た十郎度々参つて五月蠅からうけれども氣になつてならぬからやつて來ました妻いゑく何ういたしまして貴郎様でもお出で

大久保武藏鑑

下さいませんければ笑うなぞといふ陽氣なことは少しもござい
ません平生は唯もう陰氣に鬱いでばかり居りまして……十
や御尤も千萬……兄貴をうも困つたもんだねえ彼是れ一年足ら
ずになるが未だお上からも何んの沙汰もないかい 彦さあ何う
か好い工夫はなからうかとも思ふが是といふ事もなし、閉門から
此方一日でも面白の月日を送つたことがない、乃公は十六歳の時
から戦争に出で随分是れまでは艱難辛苦もしたが、又命掛けの面
白いこともあつた傷を深く受けつて、蚊が刺した位のは心で
居たが今度といふ今度ばかりは實にもう世の中が厭になつた太
平の世の中は彦左衛門杯の存命で居る世界でない、利口に立廻つ
て悪巧みばかりを専一と爲て人は悪るかれ吾れ好かれ、死んでも
命のあるやうに後生大事や金欲しやといふ、所謂澆季の世の中だ
から、正道潔白命を切りに掛けた此彦左衛門を見たやうな人物の

大久保武藏鑑

住う世界でなくなつたと思へば熱々世界が厭になつたよ 十
や尤も、兄貴の氣性じやあ然ふ思ふのは道理だ、元の起りをい
ふのは此水野や山中源太左衛門が寄つて集つて兄貴をば煽り込
んだといふやうなのが八代騒動の濫觴だ、其所を考へると今の此
不始末は實に氣の毒だよ 彦、決して爾ふでない、夫れも時節到来
唯道を遮る奴があつて悪事を知らん顔して居るからやる所まで
はやつて見やうと其所で上様御直訴とまで出掛けたんだが那れ
が悪るかつた餘まり殺、悶過ぎたかな、然し八代家は何うして居
か、颯波離音沙汰も聞かなかつたが……水野らつとも耳に挟んだ
ことがあるか、夫れも那れつ切りかな 十、拙者も絶へず八代家の
様子も聞いて居るが別に斯ふといふ變つたこともない、石見守も
貞真院も相變らずぬ、と爲て達者で居るとのこと、向うも那
の石見守の例の一件が此水野には解せない、評定所では目附衆が

二人係りの醫者が一人三人で唯検査を爲たといふたけの事兄貴は實地を見たんじやあるまい 査さあ疑つて見れば然ふだが正逆に公儀のお目附といふ堂々たる目附兩人が可笑なこともしまいと思ふ、又公儀の醫者が……而も典樂頭が卑怯の振舞もあるまいと思ふ就ては水野、先づ心得の爲にお前の胸を一つ借りて話しをするといふは外でもあい……あ、これ金彌は居るか、金彌は居るか「はい……金彌さん御前が召します」次の間よりいたして十四五に相成る大久保の扨從齋藤金彌といふ温厚い息子でございませうが、水野の前に兩手を突まして「金入つしやいませ」十「あ、何んだ兄貴……此金彌は何か用があつて呼んだのかい 査水野此小僧に就て少し考へたのだが不思議なことがあればある者昨日の朝のことだが此金彌が私が便所へ參つて出てゐると水を手にかけて掛けて呉れやうと待つて居た私は何心

なく兩手を洗つて立うとする、金彌は椽側の端にこう水が水張つて居た、するりと滑つた機みに物のあやまちといふものは恐ろしいもので椽から落ちる途端に鉢前の傍に青竹の切削いだやつが立つて居た夫へ平手を突通した子供のこともだからきやつといふて泣出した、可愛相だから拙者が下りて抱起して見る、深さ五分も青竹で笑切り長さが一寸ばかり如何にも出血夥しく何うしても止まらん、こりやあ、人療治では不可ないと思つて心配をしたけれど、此節柄のこと醫者を呼ぶのも如何と思つたが、笹尾喜内がいふには醫者位は構わまいといふから夫れではといふので醫者を呼びにやつた尤も出入りではあるし是れ、だといふも宜しうございませうと早速来て呉れたが……と査左衛門膝を進めました

大久保武藏鑑

彦早速血沙を止め、猶又疵口にとげでも遣入つて居はしまいかと
 眼鏡を以て是を改め其所で疵口を洗つて前後から膏藥を張つて
 然ふして布で此通りまゝ手を縛つて手當の藥なすを置いて歸つ
 た夫れから又先刻も来て疵口を段々改めて御前御覽遊ばせ此通
 り古びが段々付きます昨日の朝の疵のやうではございませぬも
 う大丈夫といはれて拙者も能く見ると、昨日の朝は痛みも強く一
 且は膨上がりさうで臍でも持たなければ好いが……」と思つたが
 外療といふは妙なもので何ういふ風に治療をするものか今日は
 はや痛みも忘れたやうになつたと云ひ漸々に肉を上げて来て其
 疵口が斯ふ自然に古びが付いて來るといふのは妙だ、其所で水野
 乃公が一つ考ひたてな、此春八代石見奴が御評定所開廷の日に至

大久保武藏鑑

つて病氣届け夫れから跡は十日餘りも音沙汰なしで、其所で堪ら
 ないから老中の青山の所へいつて談し付けた、青山が成ほどと思
 つたから夫れから石見守を催促をした、其所で漸う出掛けて來た
 が吹上御評定所の結果は貴様も聞く通り乃公の不始末、先方の先
 づ大勝利、八代石見が男女の交際が出來ない不具の身体にあつて
 居るといふ始末、醫者から其模様を聞くと三四年前に切つたもの
 であるといふ其證據には疵口に古びが付いて居るとの事、然し昨
 日付けた那の疵が今日に至つてあゝ古びが付く夫れや是れやを
 思合せると八代石見守が十日餘も引籠つて病氣と號し居る其内
 の仕事はいふにいはれぬ秘密がありはせぬかと思ふが何うだい
 水野、療治の點は乃公の醫者でねえから分かれぬが、先づ然ういふ
 考がへが付いた
 聞終つた水野十郎左衛門 十、うひー兄貴お待ちよ、此りやあ好い

大久保武蔵 鑑

種を揃ひたな、これ金彌 金はい 十、前の紙を一、水野に見せ
ろ痛くなければ其布を取て見せる 金、長まりましてございます
金彌は白布で巻いたのを解いて 金、前、尾漏ながら御覽を……
燭臺を引寄、まして能く打眺めて 十、昨日の朝の紙が是れか
金、左様でございます 十、何んといふ膏藥だ、是は兄貴…… 彦別
に氣にも留めないが何んだか醫者つばうが持つて来たんだ
十、宜しい、いや兄貴私は歸るよ 彦、何んだい突然に……まま一と
口 十、いや、所じやあない又悠然御馳走にならう 妻、あれまあ
水野の御前宜しいじやあございませんか 十、いや、御家内御
留め下さつては困る……金彌大事にしろと水野はふいと歸つた
彦、粗々つかしい男じやあないか、印籠を置いて往つちまつた
水野十郎左衛門は錦の小路を飛出すと時しも、催ひにして星も
なく真つ暗闇、二千五百石の大身本來なれば忍び歩きとは云ひな

大久保武蔵 鑑

がら若黨に仲間位いば供に連れて歩かなければなりませぬのだ
が朋友の爲を思つてかたつた一人、駿河臺を下りまして小川町通
りからいたして飯田町に掛らんと組橋へさし掛りますとば
んど打出すは市ヶ谷八幡の四ッ(午後十時)の鐘今と違つて此頃は
もう淋しうございます、組橋を渡つて土手四番町に歸るのである
から中坂を登らうといふ、新河岸の所へ差掛りましたると向ふ
から包みを背負ひまして町人風の男が草履を穿いてすた、來
る何思ひけん水野十郎左衛門大手を廣げて其前に 塞がると大
いに驚いた彼男 男、ご、ご、御免下さいまし、眞つ平御免下さい
まし 十、これ、大きな聲をするな聲を立てると叩つ切ると
男、へい……か長りました御免なすつて……山の手は物騒だ、
と噂さには聞いて居たが大變だなあ 十、手前は何者だ、何家の若
い者だ 男、へい、私しでございますか、私しは神田でございます

大久保武蔵 鑑

十「神田の何所だ 男須田町で 十「何んだ町人に遠ひないが何んだ 男へい馬具屋でございます、唯今番町邊のお屋敷へ納め物をいたしまして又古いお直し物を受取りましたから夫を背負つて歸る所でございます、へいもう……何んにもございませぬ何うぞ御勘辨を願ひたう存じます 十「これく乃公は辻強盗ではないぞぞ斯う見えても然ふいふ悪い事をする者ではないから安心して乃公の云ふ事を聞けつ 十「然らば其包みは馬具の直し物だな 男「御意にございます賣つたつて金子にはなりましたね、御定紋や何か付いて居りますから十「籠棒、奴、馬具などを賣るなんて然んかことをするか、お前乃公を間違ひて居るんだ泥坊じやあない、外ではないがの朋友を救はなければならぬことが出来て其處で或る屋敷に乃公が探偵をするんだけれども大小を差して打つ割、羽織に白小倉の袴、夜るさへ

大久保武蔵 鑑

目立つ武家姿、夫れでは少し仕事が出来んから町人の身拵をちよいと借りたいのだが恰も好し通り掛つたが手前の不運手間は取らせん一時ばかりだ、手前身拵を貸して呉れ、其代り乃公の此袴、羽織を貴様に暫時の間預けて行くから貴様の身拵を貸して呉れる 男「へい御前さま何か理由は分りませぬが……左様なれば町人の打拵がお入用で 十「うむ大小までも貴様に預けて置くから心配することはない侍姿で薪の所に立つて居れば夫れで好いんだ……一つ時ばかり成るだけ早く歸つて来るから乃公は飯田町中坂の屋敷までちよいと行けば夫で好いんだから…… 男「左様で御座ますか宜しうございます何うぞ 男「手は願ひたう存じますとくると、帯を解き始めた、水野も大小を取り袴を脱ぎ帯を解き 十「さ、是れを着て大小を差して…… 男「へい有難ふ存じます、水野は行丈けの短かい町人の三留の布子に双子木綿の羽織、千草の股

大久保武藏燈

引の短かいのを穿き麻裏草履を突掛け 十「よし〜是れで出来
た、これ町人なせ大小を左りへ差すんだ 男「是れじやあ反對でけ
すか 十「抜けるものか其所でちよいと断つて置くが乃公は土手
三番町に屋敷を持つて居るお使を勤める水野十郎左衛門とい
ふ旗本たぞ安心して居る友達を助ける爲に使ふんだ、安心して其
所に立つて居れば宜しいんだ 男「貴郎様が水野十郎左衛門様で
ございますか、へえー、お名前は覚えて伺つて知つて居りますが恐ろ
しく強いお方でございますさうで 十「なに恐ろしく強いことは
ないが乃公の名前を聞いて居るといへば頼母しい奴だ……其代
り今に埋合せをしてやるから 男「はい有難い仕合せでございま
す 十「何事があつても手前其所を立去つては不可んど、人に聞か
れたら今に友達が来るとさへいつて置けば宜しい」と町人に言合
めて置いて是から飛ぶが如くに中坂の方へ昇つて参りました、町

大久保武藏燈

人は呆然と待つて居る
水野は中坂の八代石見守屋敷の通用門に掛りましてとん〜
〜 十「御門番々々々」一万三千石でも流石は大名門番に足輕の
四人も詰めて居ります 甲「誰方〜」 十「御門番一寸伺ひますが
此方様は八代石見守さまでございますな 甲「八代石見守は手前
だが何んだい今時分、四つ過ぎじやあないかなんだ 十「へい決し
て御心配のものではございませぬ私しは神田邊の者でございま
すが少しく伺ひたいことがあつて出ましたが、ちよいと伺ひたい
ことがあるので其所で返事をして下されば好いでげす 甲「何
んだ同役何んだらう 乙「滅多なことを仰しやるな、此節柄でござ
いますぞ、御家老から御沙汰のあつた通り夜中何者が参つてもう
つかりした事をいつてはならぬといふことはお心得でござらう
甲「夫れは承知、何んだい 十「御門番さん甚だ恐れ入りましたが是

は極く内々此所に百疋ございますから……せめてお土産をと存
じましたかもう遅うございます、明朝一口召上つて頂戴いたし
たう存じます、御當番は何人入つしやるかは存じませぬがほんの
一口召上つて頂戴いたしたう存じます、括りの此方に小さな小
窓がある、其小窓の所からばつたり書しますると、甲「氣の毒だな
あ此りやあ何うも……此んな心配には及ばんのに、乙「やあ一分
ある、全体町人何を附に來たのだい早く云ひなさい

第十九席

十「へい、え、外ではございませぬが、唯今私しの内で友達が集つて
博奕を爲て居りましたするも勝負のことから喧嘩を始めて恐ろ
しい怪我人が出来まして命にも係はります位いの大疵でござい
ますで、色々評議をいたしました所が、友達の一人が申すには飯田

町中坂上の八代様にお出入りをする名人のお醫者がある其お名
前を聞損じたのが誤りであるが、まあお屋敷へ往つて伺つたら分
るだらうとのことございます、御大家さまへ夜中斯んなことを
伺ひに出ましては甚だ恐れ入りますが人命に係はりまする位い
のことであるから、其故推してお願ひに出したのでございます
御當家さまへお出入りのお醫者様のお名前を一寸伺ひたう存じ
ます、是を聞いて門番が、甲「同役、乙「え、甲「外のことござら
んお醫者だから好うございませう、乙「左様さ、甲「夫りやあな町
人屋敷にもお抱への醫者もあるし古くから居る御分御講代の醫
者はあるが、頭お召抱へ同様になつた醫者が怪我は名人だ
十「へい、其怪我に名人のお醫者様が結構なのでございます、何ん
といふお名前……甲「夫りやあ、直きに中坂下の町醫者だ、村
山蟠龍さんだ、十「へえ、村山蟠龍さん、甲「あ、此りやあ此春か

らお出入りにありました。十「左様でございますか、大きに有難ふ存じます。中坂下の村山鯉龍さん、何うも此りやあお隠氣のお邪魔をいたしました。甲「町人く……あ、一も往つちまつた……同役何んだらう。乙「何んだじやあない全く負傷人があつて困つて居るんだ、何んぞ奴だ。甲「面は見なかつた何しろ一分に有付いたと此社會の常門番は悦んで居る。此方は水野飛ぶが如くに戻つて参りまして。十「あいや大きに待違だつたらう。町「是は最前のお侍さん思ひの外お早うございしました。十「貴様が待遠がつて居るだらうと思つて急いでやつて来たんだ、おで用が辨じた。町「はあ左様でございますか。十「何かなかつたか、怖いものにも邂逅さなかつたか。町「お武家さま、お武家てえものは恐ろしいものでございませぬ。十「なせ。町「私しが此薪の蔭に立つて居りますと組橋を渡つて此新河岸へ這入

つて来た兩人の男、私しも止せば好いんでございませぬが突然つと往來へ出まして前へ立はだかり此か刀の長い所を見せびらかしますとわーつ……といふと二人の奴は夢中になつて逃げて行きました。十「程面白うございませぬ。十「悪るい冗談をするな。あ、直きに然んなことを爲たがつて困るさあ。若替ろく」と愛で着物を着替へまして。十「其方は神田の須田町といふが外に手前に禮の爲やうもない又手前が親方でも縮尻つたり又は私消や何かで財布尻の付かきいやうなことがあつたらば乃公が親方を説付けて詫をしてやるから安心して居る。町「有難い仕合せでございませぬ、御前さま追々暮が近付きます、實は少々吉原通ひをいたして居りまして帳面を胡麻化し帳面尻が押付きませぬ、恐るくす。私「梵天國に成りますか、早い手が屋敷へ改めて水野十郎左衛門の私消を……。十「餘まり早い手が屋敷へ改めて水野十郎左衛門

大久保武藏燈

と尋ねて来い、町「じやあ且那さま近日是非お尋ね申します
十」を、尋ねて来い、陰膳据ゑて待つて居りますだ、町「へい、い、旨
いことを仰しやつて御機嫌宜しう……」と彼町人は戻つて行く
水野十郎左衛門に於ては是れからいたして巳れの宅へ立歸りま
したのが是より策略を以て飯田町中坂下外科醫者村山幡龍を引寄
せまして八代家の秘密を探るといふ、八代一件再調への端緒でこ
さいます
朋友に信ありとは宜う申しましたもので四ッ谷六法白柄紐の旗
本水野十郎左衛門が大久保彦左衛門の件に就いて悉く心配を
いたし前回申し上げました通り飯田町中坂八代石見守屋敷門前
に至り己れ職人の姿とあつて門番の眼を眩まし當時出入りの外
科醫村山幡龍云々といふことを聞き取りまして直ぐに支度を直し
立ち歸りましたが翌日早速中坂下村山幡龍へ仲間「何か委しく

大久保武藏燈

申し付けて迎ひに遣はしました、仲「お頼み申します、取次「せー
れ」取次のものが夫へ出て来て見ると仲間「一人、仲「村山幡龍先
生のお宅は此方でございますか、取「あー此方だ、仲「私しは三番
町の水野の屋敷から出ましたので是非大先生にお出でを蒙り
たいもので殿様が昨夜怪我をなさいました、何うか外科の道具を
持つて直ぐにお出でを願ひたく存じます、取「あ、仲「就いては
お駕輿を只今使はしますから急いでお出で下さいまし、其時分駕
輿で迎ひが来るといふのは余程向ふを尊んでからのこと、早速に
右の趣きを幡龍に申しますと村山幡龍は石見守のところへ出入
をするやうに成つてから工面も大變に宜うなりまして尙此事を
聞いて、幡「宜い時は宜いものだ、福徳の三年目旗本の中でも水野
十郎左衛門といふ人は家柄なもの、其人が怪我をしたに就いて
輿を持つて迎ひに来る此療治を本當に仕上げてやれば旗本八万

騎は大方乃公の得意になるだらう、する事が華美だといふから定
めし餘徳があるに相違ない、當人類りに悦んで居る内に駕輿が
来たから意氣揚々とその駕輿へ乗つて水野の屋敷を差してまい
りました
さて來つて見ると家來一同玄關へ迎ひに出て下へもおかぬやう
甲「これは」先生宜うお出で下さいましたさあ何うぞ此方へと
いふ實に叮嚀だから神ならぬ身の凡夫の幡龍巧まるゝとは少し
も知らず、はくはく喜んで心の内に 幡水野と云ふ男は亂暴狼籍
だといふから定めて屋敷も然うだらうと思つたが見ると聞くど
は大きな相違、流石は名高い旗本の家だけに禮義のあるのは驚ろ
き入つたものだ」と一問内へ通つて 幡「早速お尋ね申すが御主
人の御様子は何んな工合で……」家來「いえ夜前少々申し上げか
ねた怪我をいたして近頃外科では貴殿の上を越す方はないと云

ふ、それゆへ主人が是非共先生をお願ひ申して來よとのこと、只今
直に主人の居間へ御案内をいたしましたから暫時これにてお待ち
受けを願ひます 幡「いやお待ち申すのは構はぬが怪我といふ
ものは手遅れになると十日で治るものが二月二十日で治るも
のが半年掛るやうなことがございます 家「いえこの邊は考へて
おりますから先生を願ひましたので只今居間を片附ております
から少々……」といふ内に來たのが四つ半時分、然るに正午時分に
なつても食事もさせない、然う斯うする内に八つ、まだ沙汰がない
一同へ幡龍茫然と座つて煙草を飲みたくも火は消へて居るし、咽
が乾いても茶はなし腹は減つて來る、來た時の叮嚀に引き替へて
打つて變つた様子 幡「はてなして見ると餘程悪いのか知らん惡
ければ何とか沙汰を仕そうなものだが何んでこんな待たして
おくのか」と不審に存じて居る内に入つても過ぎてはや七つ、燈火の

百六十八
點く時分になつて来た、蟬龍仕方がないから手を叩いたが誰も出
て来ない。蟬「何うも怪しからん、人を待たして手を打つても返事
をしないとは。蟬云ふ内に漸く廊下を通る一人の男。蟬もしく
男「はい何だい。蟬「少やお尋ね申す忘れたのではござらんか。醫者
村山蟬龍、今朝からこれに扣へております。男「あー然う。只今
案内をするから少し待たつしやい、實はこれまで捨ておいた
のはお見舞にお出でになつていた方々へ一々御挨拶をなすつて
居たものだから、一直だ、二た時か三時……

第二十席

蟬「二た時か三時はちと酷いではござらんか、左様なら少々願ひま
すが早朝から支度をいたしてまいりませんので實は蟬龍空腹で
相成りません、何でも宜しい食事を一つ。男「成る程空腹になつた

百六十九
……いや其邊も御存知だらう、今お手當を下さるから待ちなさい
腹の減つた位い何でもなかつた昔し加藤主計頭清正といふ人
は四ヶ月の間朝鮮の蔚山に籠城をして終ひには壁の泥を喰つて
居たといふ話がある、その邊から考へて見るとまだ一日や半日は
何でもなないよ、蟬「清正公と一緒にしちやあ不可ません
男「今直に來るよ」と云つて行き過ぎて仕まう暫らく待つて居ると
漸う一人出て來て、男「さあ蟬龍待ち遠うであつたらう、漸うお客
もお返りになつたから此方へこのこととござる。蟬「あー左様で
ござるか」とはつと一息吐いて奥へ通つて見ると旗本衆七八人
正面のところに水野十郎左衛門若座をして大蝦蟇をかんと點
けて御酒宴、若座程酔酌の様子
十郎左衛門「臙臙たる酔眼を開いて「十やあ来たか、蟬龍これへく
此方へ來て一杯呑め入れ變り立ち變り客が來て到く遅くなつた

大久保武藏鑑

が其方も嘸待遠であつたらう、さあこれへ来て一杯呑め 蟠へい
難有う存じます 十「さあ呑め 蟠、難有き仕合せに存じます
十」之等は皆予が朋友であるから心配をいたすな、すると脇に居た
お旗本が 甲「うー、何かい水野、村山、蟠龍といふのは此の男か、申
や、蟠幹は好し、眼中の説いどころ一通りの奴ではないな 十「い
や、然うでないい、蟠、蟠と云ふ時は斯ういふ顔色でなければ、敵は
睨み返せん、察めるのだから悪く云ふのだから分らない、蟠龍何だか夢
を見て居るやうな心持 蟠、少々伺ひます 十「何じや 蟠、御前様
は夜前俄かにお怪我を遊ばしたろうでございませす 十「なに怪我
をした……誰が 蟠、御前様が 十「馬鹿かことを申せ誰がそんな
ことを云つた、いや、誰が左様なことを申したよ 蟠へゑ、然ら
ば愚老を何んでお招きになりましたのでございませす 十「それは
家來共の云ひやうが違つたのか、其方の聞きやうが違つたのか、何

大久保武藏鑑

も怪我をしたから療治をしてくれと云つてやつたのではない、い
ろく、蟠を述べたいことがあるから来てくれると申したのだ、空
体禮を云ふのに呼ぶと云ふのは間違つて居るが……當方からま
いるべきだが吾々身分柄として其方醫者なぞの宅へまいること
は出来ん、又人目に觸れやすい然う云ふことから露見をしてはな
らんと存じたから呼んだので、これに並んで居るものは八代石見
守の一家一門、又拙者は石見守と兄弟同様のもの、心配はいたす
な 蟠へゑ、十「此度石見の儀に就いて其方が醫の道に悉々く
禁じてあることをいたして、重三郎當時石見守を其方が助けて呉
れたに就いて、蟠を述べやうと心得て呼びよせたのである、決して
心配をするな 蟠、左様でございませすか、すると一人夫へ進んで
甲「これ蟠龍 蟠へい 甲「今も水野の云ふ通り其方の全く骨折で
あつた、蟠、其の頭大久保彦左衛門といふ阿爺は動ともすると天

大久保武藏

正の三年歳の眞女珠山を賣物にして吾々を小供同様に心得て居る、那んか何うも怪しからん爺いは無い、その鼻を折つて呉れたのは眞個八代石見守の計略とはいひながら其方と云ふものがあつたからで大きに御苦勞であつた今日は其禮を述べやうと思つて呼んだのである主人、約束のものをやつては如何、十左様こりやあなむ蟠龍誠に少ないが吾々共からの禮だ、三十兩の金子を平臺に乗せて蟠龍の前へ出したのを、蟠龍も御前様最前から禮だ、と仰しやいます、何んのお禮で、十、白痴けるな其方は誠に怪しからん奴だ、この通り三十兩の禮を因縁の無いものに遣はす奴があるものか何のお禮でございますとは何だ其方胸に覺へがあらう

大久保武藏

据へて水野に向ひまして、蟠龍御前不思議を御縁を持ちまして今日拙者を召されこれが自然と廣まりますれば又御同席のお旗本様方御座々の方々へお出入も叶いますので醫者の身に取りましては大慶此上もございせんが、斯く夥しき御禮物を受けまする處へは曾てございせんが如何あることを申し上げるやうではございませぬが道理なき金子を頂くことは出来ません、それだけ療治をいたし思召しのお謝儀を頂きませぬは醫者の常、夫等のことも無くして莫大なるお目録、何うも蟠龍心苦しく存じますから御辭退をいたしますより外に詞はございませぬ、十、これ、御龍其方は合點の行かぬ人では無い、か大抵云はず語らず以必傳心、禮物だと云つたらば推量が出来そうなるものである、合點が行かなければ分るやうに話しをするが八代一萬三千石は貴様のお蔭で維持して居ることが出来る、然らば其禮をしなければなるまい

ではないか。きよつとした村山輪籠、面色忽ち變りまして 燈籠前
八代云々なぞとはそりや何事ぞとさいます 十はつは、斯く
まで申しても貴様が不知つくれて居るところを見ると餘程秘密
に隠されたと見へる、もし宜い八代石見守の屋敷もこの水野十郎
左衛門の邸宅も同じ事だと思つて安堵してくれませうに……
ろの理由といふは八代石見守は即ちこの水野十郎左衛門と切つ
ても切れぬ肉縁の間柄である云ふ事はまだ貴様に話しを仕な
かつたが 嬌へゑ…… 十いや生返事をするな水野と八代家
とは縁家であると云ふことを貴様一向知らぬか 嬌一向存じま
せん 十も一貴様白痴けて居るには及ばぬ、當時の石見守と申す
は元八代重三郎と云つたな、其重三郎が成長をして水野十郎左
衛門が彼の烏帽子親に成つた去れば彼が元服の時に重の字を付
けてやつたのは即ち重三郎、乃公の十をやつた字だけを重ると云

ふ字に直し音は同じだ、うら十郎左衛門重三郎、これが確かな證據
である、うれから運に叶ひ時に乘じて兄哥の跡目を相續して石見
守と任官をいたし、大名の列に加はつて居るまゝこれ迄の所は誠
に無事であつたがさて若ひ者の無分別とは申しながら兄嫁の貞
真院と密會をしたのが發覺して八代家騒動の端緒となつた、此春
の一件は貴様も知つて居るだらうが、今となつては是非非常の
手段をいたさなければ一萬三千石の危ういといふ所から貞真院
の實父當時時めく老中本多上野之助の指金で石見守も今は絶体
絶命の場合に臨んで男子たるべきものがこの上もない惜むべき
一物を切斷いたすなといふのは、寧ろ死ぬにも勝るところの苦
しみであらう、石見蟠能く決心をいたしてくれ、ければ己れで
決心いたしても自ら刃を當てがふと云ふことは之は出来ぬ、然
るを貴様が秘密を知つてこの頼みに應じて石見守の一物を切斷

いたして格別跡々の痛みもないやうに面も日敷を経ずして其口が五七年跡に切つたも同様に古びを付けるなぞといふところはこりや和蘭陀外科一子相傳不思議の奇術並々の数醫者などに出来る業ではない、流石は村山蟠龍斯る名醫のある事と諸人が知らぬといふは如何にも嘆かばしいことである、蟠龍老右の次第であるから貴様は八代家一萬三千石再興の大恩人、縁に繋がる水野十郎左衛門が病氣に事寄せ貴様を呼よせ、この禮物を贈るといふは決して常体のことではない辭退に及ばんこれに居る近藤登之助、兼松又四郎、山中原太左衛門曾この身の親友である他に漏れる次第はない、安堵いたして其金を受けて下さい、十郎左衛門の志し受納してくれよと云れて村山は下げて居た面をきつと上た

第二十一席

此時村山蟠龍はきつと面を上げまして膝をはたと打ち、蟠龍初めて伺ひましてございませすが然う云ふ御縁合の間柄とは今までは曾て存じませせん、漸く安心いたしました胸の雲霧も晴れましてございます、併し斯やうに高大の御謝物を頂きましては相済みませんが、御大様よりの恩賜難有く頂戴いたします、士、いや夫で水野も安心朋友一同も氣が落着いたと申すものである、さ、打ち寛ろいて一献肴め……近藤、注いでやつて下さい、蟠龍有き仕合せにございます、この時朋友三名が、又、水野逆ものことに其手術の不思議を聞こうしやあないか、士、うむ成程それも宜からう……蟠龍老朋友が只今申し入れた通り、其石見の手當をした手術や何かのことでも一寸聞きたいものである、蟠龍へい長まりました、別、手術といふ程のことでもございませせん、手前の習ひ覺へましたる和蘭陀外科……士、それは然うでもあらうが、何う云ふ由で命に

大久保武藏鑑

も係はらず跡の疵が癒へたところと云ひ、古びの着いた鹽梅と云ひ、其所が手術でなければ出来ぬことである。蟠龍老様でございませす。これは和蘭陀外科の日本語を訳しますと即明膏と云ふ奇の膏薬がありました。これは分大金が掛ります。常に私慮いたして並大抵の者には施しません。醫は仁術とは申しながら資本の遣き町醫のこと、この薬は容易には盛りませんが荷しくも天下諸侯の一大事の儀と存じましたから私しも張り込んで即明膏と云ふ妙薬を用ひましてございます。十成程……何うだい。こゝ朋友和蘭陀で何とか云ふ六けしい名だらうが、日本語で即明膏……登うひ成程……これ、蟠龍老、横合から口を出すやうではあるが、それで石見の陽物が七八年跡に切つたやうに疵に古びが付いて居たと云ふことだが己に評定所におひて立會のお醫者その他目付衆、如何にも六七年跡は経過いたした古疵だ、それが爲

大久保武藏鑑

あに大久保彦左衛門が閉口して仕まつて遂ぞない事、閉門を云ひつつかつても強情を張る事も出来ないやうな始末、證據と云ふものは恐ろしいもんだが蟠龍老、ろりやあ皆お前の薬の驗しだな。蟠龍老にございます。登毒薬變じて薬になると云ふ毒にもなれば薬にもなる不思議なものも世界にあるな、併し悪人を助けるため、即明膏と云ふものは出来て居るのではあるまい、誤つて我怪あぞをいたした者のために、早く全快するやうにと云ふ神の授けた不思議な妙薬、それが石見の爲になると云ふ、ひ……旗本三名は顔を見合して仕済ましたりと莞爾と笑ふ、十郎左衛門も何やらん思案が決定つたと見えまして、十、これ金兵衛居るか、綱右衛門支度が宜ければまいれ、水野十郎左衛門の用人に金時、金兵衛、渡邊綱右衛門と云ふ二人がある、大層な名を付けたものでございます。

て兩人立ち出で、金御前宜しうございますか、十「縛れ、餌はつと云ふと忽ち立ち上つて村山蟠龍を情け容赦も荒縄で高手小手に縛りました、大に驚く村山が、蟠こりやあ何を遊ばします、如何なことであります、と藻掻くを、金「一控へて居れ」と身動きもならぬ有様、如何なることになり行くかと思ふ、一「標へてをりませ、十郎左衛門此時時を逃まして、十「最前より汝が申したる言葉は、儲かな證人、この水野一人ではないぞ、聞役は天下旗本三名、最早免るゝ所はないから覺悟をいたせ、この一言を聞き蟠龍再度驚きまして、蟠すりや最前より申し上げましたるの事が證據となり、と云ふ御言葉……、十「を、朋友大久保彦左衛門が身に降りかゝつた不慮の災難、皆其方の一存より出でたること、利慾の爲めに心迷ひ醫者にあるまじきところの振舞、八代石見の頼みを受けて手術を施し人間大切なる陽物を切ると云ふ汝は即ち悪魔外道……

十「醫は仁術とは何の痴言である、之より大久保彦左衛門再吟味を願ふところの汝は確かな證人、水野十郎左衛門が一すも動かさなから之より駿河臺大久保彦左衛門宅へ連れ行くまでは、じつとして居れ、村山蟠龍は之を聞き情々として頭を掻げ、蟠も、う今更逃げるにも逃げられず、争うことも出来ません、如何様にも御自由に遊ばして下さいまし」と覺悟の体、茲において水野が蟠龍をそのまゝに駕輿に乗せて勢ひ日頃百倍にしたることに、早速馬に打ち乗つて駿河臺大久保屋敷をまして来たのは六つ頃でございます、其跡から近藤兼松、中山、勘う云ふことは大好であるからぞろろ、大久保の屋敷へ居いてまゐります、彦左衛門の屋敷においては何事なるかと思ふ内に、水野門外に大音を上げて、十「當家の主人大久保彦左衛門は間もなく晴天白日の身とあり公儀よりお許しを受くるは近きにあり、家中の面

々喜ばれよ兎にも角にも開門いたせ門番は驚いて門を開きます
るとぞろ／＼と入り来るこの一行奥へ右の段と告げますると彦
左衛門も中の口まで出で迎へました 十「さあ兄貴、安心なさい
漸く證據が捕まつた、今日は如何なる吉日であるか愉快々」と叫
ぶ跡に續きますする三名の豪傑、駕輿へ乗せて連れまゐりましたは
怪しげなる囚人体、彦左衛門一圓合點が往かず、然るに水野におい
ては初まりは斯様中ばは云々終りは斯う云ふ事になり入つたど
話しを仕たから横手を打つて大久保が跳り上つて喜びまして
彦「あー持つべきものは朋友だ、水野の切斯の如く瞬遠には行く
まいと存じたが辱ない……就いては各々方三名何時に初めず宜
く盡力をいたして下すつた辱ない禮は追つて云ふと仕ませう強
情我慢の大久保氏も今日は心底から禮を云ふ様子 十「まあ、
禮をぞは何うでも宜しい」と之から蟠龍を引き出して大久保の前

に据ゑる彦左衛門はつたと睨んで 彦「やい蟠龍とやら今更彼
は申さん朋友水野十郎左衛門の心切で汝の悪事が露見いたした
以上は大久保のためには此上もない大切な證人まづられまでの
間は身体を大切に居れ、彌々出る所へ出で水野の前で申した
言葉と相違があるぞ踏み殺しても飽き足らぬぞ 蟠「いゝ斯うな
りました以上は私しも先非後悔いたしました、村山蟠龍お證人に
相成りまするでございませう、この身は如何なるお所刑になりま
せうども最早死ねぬ所、覺悟いたしております、唯々未練なことを
申し上ぐるやうではございませうが根が私しも立派な侍でもなし
高の知れたる接摩上りの數番者でございませうから餘儀なく濟ま
ぬことゝは知りながら御法に背いた事をいたしました、今更後
悔先に立たず、この八代家の一條が落着に成りました後は各々道
方のお働さを持ちまして何うか成る丈罪は軽くなりますやうに

大久保武藏鑑

自由なことを申し上ぐるやうではございませうが當家の御主人土
久保様又水野様御一同様お慈悲でございませう願くは無罪に相成
りますやうに偏へに願ひ奉つると性は善なる人心、村山蟠龍涙を
翻して嘆願をする

大久保片頬に笑を含んで 査られはまた含んでおこす其方を重
罪に落したところが別に益もない事であるから然んなに心配を
するな精神錯亂して狂人にでもなると不可ない、然うなられては
此方の不都合、まあ落付て酒でも飲め 蟠中々御進なぞは頂けま
せん 査は、い、い、弱い奴だ、繩を解いてやれ繩を解て手當をして
やりました
借捨て、もおかれぬから何う云ふ順序にしたらば宜からうと四
名が額を合して相談をいたしたが無しる主人公の大久保が閉門

大久保武藏鑑

大久保武藏鑑

前編終

といふのでありますから何うすることも出来ませぬ

終

